

大学共同利用機関法人

人間 文化

—にんげんぶんか—

vol. 20

2013

人間文化研究機構 第21回公開講演会・シンポジウム

海を渡った日本語

Japanese Language across the Ocean

趣旨説明

海を渡った日本語を見つめる / 朝日 祥之

講演

台湾に生まれた日本語系クレオール語 / 真田 信治

ハワイの近現代と日本語 / 原山 浩介

海を渡った日本語と音楽 / 小西 潤子

日系人と日本語 / 小嶋 茂

米国日系人の言語使用 / 森本 豊富

パネル・ディスカッション

「海を渡った日本語」



人間文化研究機構 第21回公開講演会・シンポジウム

海を渡った日本語

日時：平成25年9月1日

会場：一橋記念講堂（東京）

目次

機構長あいさつ 金田 章裕 02

趣旨説明

海を渡った日本語を見つめる 朝日 祥之 04

講演

台湾に生まれた日本語系クレオール語 真田 信治 09

ハワイの近現代と日本語

—1930～40年代の街のくらしから— 原山 浩介 16

海を渡った日本語と音楽

—パラオの歌を事例に— 小西 潤子 23

日系人と日本語

移住先国における日本語の受容と変容 小嶋 茂 29

米国日系人の言語使用

—カタカナ表記の「揺れ」を中心に— 森本 豊富 40

パネル・ディスカッション

海を渡った日本語

朝日 祥之（コーディネーター）・真田 信治・

原山 浩介・小西 潤子・小嶋 茂・森本 豊富 48

主催機関あいさつ 影山 太郎 57

機構長挨拶

金田 章裕

（きんだ・あきひろ／人間文化研究機構長）

本日は、本機構の第21回公開講演会・シンポジウムにご来臨いただきましてありがとうございます。人間文化研究機構は、ちょうど10年前に国立大学が法人化されたときに、大学共同利用機関法人として、それまで国の直轄の研究所であったものを集めて出来上がったものです。

現在、佐倉市に国立歴史民俗博物館、立川市に国文学研究資料館、本日の担当をしている国立国語研究所も立川市にあります。それから、京都市に国際日本文化研究センターと総合地球環境学研究所があります。国立民族学博物館は大阪の吹田市にあります。この六つの研究機関からできており、それぞれが研究を進めると同時に、大学共同利用機関法人ですので、共同利用・共同研究ということを実施しております。主に大学の先生ですが、昨年、共同研究に参加していただいている国内の先生方は約2500人、海外の方が約500人です。合計3000人以上の方々が共同研究に参加してくださっています。

研究は各研究機関が主催しているものもたくさんありますが、機構本部が中心となって企画・運営しているものもあります。地域研究推進のためのプロジェクト、「イスラーム地域研究」、「現代中国地域研究」に加え、「現代インド地域研究」もすすめております。

さらに、本日の企画とも関係するプロジェクトで、日本関連在外資料の調査研究というプロジェクトも実施しております。これは、日本に本来あった資料が海外に出て、そこでいろいろな形で存在するものについて、それらをきちんと調査して、ちゃんとしたリストを作ると同時に、それらをできればデジタル化して、日本国内の研究者、外国の研究者にも広く使っていただけるようにするという趣旨のものです。古いものはシーボルトのコレクションから始まっていろいろなものがあります。

そのうちの一つに、本日のテーマと関わる「海外に渡った日本語」というものがあります。つまり、多くの移民の方々と同時に、日本語そのものが海外に伝わりまして、海外の日系人コミュニティで使われる日本語です。これはさまざまな形で使われていますが、長い間に、本国の日本語、われわれが使っている日本語とはやや違う色彩を持つようになったものが多いわけです。

個人的な経験で大変恐縮ですが、私自身もそのことでびっくりしたことがあります。私はフランス語は全然できないのですが、フランスに会議のために行く必要がありまして、その会議やそれに関連する視察のときに、現地に在住されている日本人の方3人にチームを組んで通訳をしていただきました。そのうちの2人は大変若い方でした。さらに、そのうちの1人は通訳チームのリーダーだったのですが、私と同年代くらいのご婦人でした。恐らく非常に立派なフランス語を話しておられたのだらうと思います。

私はフランス語が正確であるのかどうかは分からないので判断できないのですが、少なくとも皆さんの日本語は正確でした。大変丁寧に通訳をしていただいてありがたかったのですが、そのうちの一番年配の方の日本語に大変驚きました。

その方はパリの在住経験が非常に長くて、そこでのキャリアは大変なものだと思うのですが、お話しになっている日本語は、私自身も小さいとき、若いときに聞いたことがあるような、昭和30年代くらいの非



金田章裕機構長

常に丁寧な日本語なのです。われわれの方の日本語が変わってきてしまっているのです。30年代の日本語を今時あらためてフランスで聞くことになろうとはとても思いませんでした。

恐らく、その方は長くパリに在住しておられて、フランス語はどんどん現地のフランス語で更新しているのでしょうけれども、日本語の方は、かつての日本語がそのまま残っているんだらうというふうに私は受け取りました。もちろん、この判断は素人的な判断ですので、正しいかどうか分かりません。

私の個人的な体験とは関係ありませんが、本日はいろいろな角度から「海を渡った日本語」ということでご報告いただきます。また、最後にはそれらをめぐってディスカッションをしていただくシンポジウムを開催する予定になっております。どうぞ、最後までごゆっくり、そして、いろいろな事実をご確認になり、いろいろなことを共にお考えいただければありがたいと思います。本日はご来場、どうもありがとうございます。



海を渡った日本語を見つめる

朝日 祥之 (国立国語研究所准教授)

あさひ・よしゆき／大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了、
博士（文学）。国立国語研究所研究員を経て、2009年より現職。

専門分野：社会言語学、接触方言学、日本語学



本日は暑い中、足をお運びくださり、ありがとうございます。趣旨説明をする前に、本日話題提供をしていただく5人の先生方の紹介からさせていただきます。

まず、私の次に話をしてくださる奈良大学の教授で、国立国語研究所の客員教授の真田信治先生です。続きまして、国立歴史民俗博物館准教授の原山浩介先生です。3人目、沖縄県立芸術大学の小西潤子先生です。そして、JICA横浜にある海外移住資料館の職員で、早稲田大学移民・エスニック文化研究所の招聘研究員でもいらっしゃる小嶋茂先生です。そして、早稲田大学教授の森本豊富先生です。

この五人の講師の先生をお招きして、それぞれの先生のご専門の立場からお話しいただくということで、今日のシンポジウムの前半を進めてまいりたいと思います。

企画立案まで

趣旨説明ですから、まず、何を思ったのか、なぜこれをやろうと思ったのか説明させていただきます。企画は私が担当しました。言葉と社会との関係についてもともと関心を持っているのですが、その中でも特に様々な目的で人が「移動する」ことによって生じる事象について強い関心を持っています。具体的には、移動した先でどういった生活をして、どういった言葉遣いをしているかということです。神戸にある西神ニュータウンでの調査が始まりで、そこから南大東島とか、サハリン（樺太）、北海道など、挑戦したのですが実際に現地に行けなかった千島列島、ハワイ、アメリカも入りますが、ブラジルなどで調査をしてきて

おります。

言語学の話になってしまうのですが、研究についてお話しします。さまざまな地域から海外に移住がなされます。広島県や高知県、和歌山県や沖縄県といったさまざまな地域の人が現地に行って共に生活をします。そういった生活の中で、言葉と言葉が接触するということがあります。接触したときに、ではそこでどんな言葉が生まれるのだろうかということに個人的には強い関心を持っています。ですので、ニュータウンことば、樺太方言、千島方言等の形成がどうなっているのかということに関心を持って研究をさせてもらっています。これはただ単に私個人だけの研究の関心ではなくて、ある一定の研究者コミュニティによって研究が進められております。

国立国語研究所で進行していた、また進行しているプロジェクトに関連していえば、私の次に話をしてくださる真田先生が進めている「日本語変種とクレオール形成過程」。また、これは終了してしまいましたが、私も「接触方言学による『言語変容類型論』の構築」というプロジェクトを担当させてもらいました。それでも、これに関する研究を進めてきております。

海を渡った日本語の使い手

今日のシンポジウムのテーマに内容を引き付けて申し上げます。さまざまな地域でフィールドワークを実施してきました。幸いなことに、それぞれの地域でさまざまな方にお会いして、いろいろな話を教えてもらっています。どんな人たちに会ってきたかという点、一つは日本人の方、もう一つは日系の方、そして、現地で日本語を習得して使っている人たちにお会いする

ことができました。皆さん、日本から来たということ日本語で伝えると、喜んで話をしてくださる方が多いというのがこれまでの経験です。

写真1の真ん中に写っていらっしゃる方は、安在さんという方なのですが、戦後、南米に行き、スペインに行き、アメリカに行きというように、あちこちを点々として生活していらっしやって、最後はロサンゼ

ルスの最近できつつあるリトルオーサカというところでお惣菜屋さんをやっている方です。さまざまな話を聞くと、非常に面白いことを教えてくださいます。たくさんの方の苦勞話もありますし、その中で強く生きていらっしやる姿にも感銘を受けま

す。この10年近く、北海道の北のサハリンで、現地でのフィールドワークをしておりましたので、そこでもたくさんの方に会っております。写真2で私の周り

にいる方々、写真3に写っていらっしやる方は全員、現地の人に日本人と呼ばれています。日系という言い方はされません。彼らは片言、または非常に流暢な日本語を話してくれます。

その一方で、実は写真3はサハリン中部のポロナイスクの日本人会ということで集まってくださったメンバーで、この中の半分は朝鮮系の方で、中にはウィルタ人のお母さんを持ち、お父さんが日本人という方も

- ▼ (写真3) ポロナイスクの日本人会メンバー
- ▶ (写真4) ニブフ (ギリヤーク) 人のお二人
- ▶ (写真5) ウィルタ人のおばあちゃん



▲リトルオーサカの安在氏と



▲サハリンの〈日本人〉の皆さん

いらっしやいます。けれども、本人たちは日本語を使って生活をしていらっしやるのです。

またサハリンの写真が続きますが、写真4、写真5の2つに写っている方々も、普段、少なくとも私と会うと日本語で話をしてくださいます。日本名が彼女たちの正式な名前です。パスポートにも日本名が表示があります。写真4の方はニブフ、またはギリヤークと呼ばれる民族で、写真5はウィルタ人のおばあちゃんです。いずれも日本語を流暢に話してくださいます。

海を渡った日本語を見つめる

さまざまな地域でいろいろな方にお話を伺いました。言語研究の立場からできることについては、私なりに取り組んできているつもりであり、今もさまざまと申しました。実はフィールドワークをやっていると、



他にどなたかが以前集めてくださった資料とか、現地の看板などに日本語の表示があつたりしますし、さまざまな形で彼らの日本語に接することがあります。

具体的にどんなものがあるかを簡単にご紹介したいと思います。馴染みがあるものが出てきます。これから写真5のおばあちゃんがある歌を歌いますが、それが何の歌か。多分、皆さんの多くの方のご年齢であれば想像がつかいかもしれません。流してみます。

(会場：音声再生)

これで歌が終わって、おばあちゃんは泣いてしまうのですけれども、これは「人生の並木道」という歌で、ご存じの方のご存じだと思いますが、昭和12年の歌謡曲です。

また、網走市にお住まいだったニヅフの方の日本語音声も、幸いにも存在しています。1958年に収録されたものです。これも20～30秒ほど流したいと思いますので、お聞きください。

(会場：音声再生)

何だこれと思うかもしれませんが、これがニヅフ語の音声です。決して言語ではないとおっしゃらないでください。

(会場：音声再生)

これは3分くらい続くので、趣旨説明ではなくなってしまうので止めます。これは『ギリヤークの昔話』というタイトルの本にまとめられている昔話の一

節です。その本自体はこの方のニヅフ語と日本語の昔話の語り、特に日本語の部分を書き起こして印刷されたものが、実際に刊行されています。その基になった音声だと申し上げておきます。

次に、これはアメリカが舞台になります。先ほど金田機構長から話があった「日本関連在外資料の調査研究」で調査対象としている、北米のUCLA(カリフォルニア大学ロサンゼルス校)に、ある音声の音源が所蔵されています。そこに収録されているテープが、かなりの量あるのですが、その中に、この写真の真ん中に出ている、日本名で比嘉太郎といいますが、トーマス・ヒガという帰米二世の方の音声があります。これも冒頭の部分だけ流します。

(会場：音声再生)

聞きはじめると止まらなくなってしまうので止めますが、こういった音源がある、ここにも日本語があるということは、恐らく皆さん、認識を持ってくださると思います。

現地の日本語情報

また、写真6、写真7はロサンゼルスのリトルトーキョーに行くとき実際にあるものです。

写真6はツーリストインフォメーションです。写真7は現地の和菓子屋さんの「三河屋」さんで売っているおまんじゅうです。「調布」という名前に自分は衝撃を受けまして、なぜ「調布」というのだということをやっと思っているのですが、いまだに答えが分からずにいます。ただ、現地の人は「調布」というと、少なくとも東京の調布を知らなければ、おまんじゅうだよねというぐらいの意識でいらっしゃるはずですよ。これも日本語を介しての情報です。

- ◀ (写真6) リトルトーキョー (LA) 旅行案内所の看板
- ▼ (写真7) 「調布まんじゅう」とは？





▲ LA の日本語新聞『羅府新報』

もちろん、現地に行くと、現在でも日本語の新聞が刊行されています。写真8の『羅府新報 (RAFU SHIMPO)』というのは、ロサンゼルス日本語新聞です。

実は先週、10日ほど前、ブラジルに行っていました。ブラジルのサンパウロにあるリベルダージという東洋街に行くと、そこにさまざまな日本語の情報が 있습니다。滞在していた期間中、ほぼ毎日通ったレストランの壁にこんなものがありました(写真9)。「KARE RAISU」、「LAMEN」、「UDON」、「YAKI-SOBA」と呼ばれます。現地で YAKI-SOBA と言えば焼きそばが出てきますし、LAMEN と言えばラーメンが出てきます。KARE RAISU と言えばカレーライスです。

もちろん、名称として現地でも馴染みがあるかもしれませんが、言葉の表し方として関心を持ってほしいのが、この LAMEN の、LA が R ではなくて L になっているということです。ポルトガル語では、特に最初に R のつづりがあると、「ラ」とは読まずに「ハ」と読むと小嶋先生から伺っていますが、そのようなことがあって、発音の混同を避けるために L で表記して



▲リベルダージ (ブラジル) のレストランにて

いるということです。

写真10はみそなのですが、何もみそと白みそがあります。白みそでないものがみそであるということは、名古屋出身の私からすると非常にありがたい情報なのですが、中をよく見てみると、左側は赤みそであり、右側は白みそであると。日本語では「赤みそ」と「白みそ」と書いてありますが、現地の言語の表記は「misso」と「shiro misso」です。このように、さまざまな面白い点もあります。

また、現地の日本語新聞も実際に刊行されており(写真11)。

こういった資料調査を「日本関連在外資料の調査研究：近現代における日本人移民とその環境に関する在外資料の調査と研究」として進めているところです。音源に関しては私が担当する音声資料チームが、また、写真などについては、後ほどハワイについての報告をしていただく原山先生の北米チームと共に調査研究を進めております。これまで見たような写真からも、さまざまな生活の側面がご覧になれたかと思います。



写真10

◀ (写真10) misso といったらやっぱり赤みそ
▼ (写真11 『サンパウロ新聞』 『Nikkei Shimbun』



写真11

彼らの言語生活を学ぶ

フィールドワークから得た資料からは、現在も日本語を使っている人がいることがわかります。かつ、昔の音声資料では50年以上前のものも含まれていて、当時の日本語を耳にすることができます。こういったことから何が言えるかという、実際の彼らの言語生活が分かるだろうと思います。

言語生活という考え方は、国立国語研究所での研究活動を支える一つの大事な考え方だと自負しております。また、言語生活という言い方自体も、日々の生活で言葉を使った活動を指す総称であるというふうに定義されています。一方で、もちろん言語生活の中の言語研究という側面もあるのですが、あるとき先輩の研究員の杉戸清樹氏が、言語生活というのは、言葉を使った生活の研究をすることだと教えていただきました。生活の研究なのかと、そのときに認識を新たに持ちました。

このシンポジウムでは、さまざまな領域の研究者の方を講師として迎えております。現地の生活の研究、例えば日本語を使ってどういう生活をしているかとい

うことを、ぜひ今日お招きした講師の方からご発題いただいて、意見交換ができればと考えます。基本的には、先ほどご紹介した5人の講師の先生それぞれからご報告を頂きます。

幸いなことに、台湾、ハワイ、パラオ、ブラジル、アメリカという結構多くの地域をこのシンポジウムでは扱います。一人の方に20～25分ほどの話題提供をお願いして、それをひととおり皆さんにお披露目いたします。その後、パネルディスカッションとして一時間ほど時間を持ちたいと思います。それぞれで扱われる日本語がどのような姿をなしているのか、どのような特徴なのかということについて考えていければと思います。質問等がおりかと思いますが、残念ながら挙手をしていただく形の質問は取れないかと思います。何かおありでしたら、ぜひお手元の質問表をご利用ください。休憩時に回収いたします。

それではどうぞ皆さん、お楽しみください。(了)



台湾に生まれた 日本語系クレオール語

真田 信治 (奈良大学教授／国立国語研究所客員教授)

さなだ・しんじ／東北大学大学院文学研究科修士課程修了（文学修士）、文学博士（大阪大学）。
大阪大学大学院教授を経て、2009年より現職。大阪大学名誉教授、
新村出記念財団監事、日本方言研究会世話人。
専門分野：日本語学、社会言語学、接触言語学



本日は台湾からの報告ということで、「台湾に生まれた日本語系クレオール語」というテーマでお話しさせていただきます。

ぎらん 宜蘭クレオール

台湾の宜蘭県の一部地域において、かつての日本植民地統治とともに台湾に渡った日本語と、現地のアタヤル語（タイヤル語）とセデック語の接触によって形成された新しい言語が話されております。この新しい言語は、台湾の老年層の方々がお話しになる台湾日本語とは異なるもので、若い人たち、子供たちも使っている、まさに新しい言語です。われわれはこれを宜蘭地域で使われているという意味合いで、「宜蘭クレオール」と名付けております。最初に、この言語のテキストから談話の一部をお聞かせしたいと思います。

あなた 何 の 運動 好き
A : anta nani no unro ski ?
(あなたはどんな運動が好きですか?)

私 好き (バスケットボール)
B : waha ski lancio.
(私はバスケットボールが好きです。)

(どうして?)
A : rostey ?
(どうして?)

運動 - たら (体) (よく) する
B : unro-tara he bla-suru
(運動は、体に良いから。)

これは日本人の方だったらお分かりだと思います

が、「waha ski lancio」、lancio というのは中国語（北京語）からの借用です。あと黒字にしたのは、音声や文法が違っておりますが、日本語からの借用といえますか、日本語由来の語です。「rostey?」は「どうして?」、「anta nani no unro ski?」は「あなた なん の 運動 好き?」です。「waha ski lancio」は「私 好き バスケットボール」で、「rostey?」に対して「unro-tara he bla-suru」。この he bla というのはアタヤル語の言葉です。「運動 - たら 体 よく - する」、運動したら体に良いということです。

次にもう少し複雑なのをお聞かせします。

あなた きょう どこ 行った
A : anta kino doko ita ?
(あなたは昨日、どこへ行った?)

私 山 (おじいさん) に
B : waha mayah akong ni miye-tita
(私は山へおじいさんを見に(会いに)行っていた。)

(おじいさん) あなた に 何 食べ (使役)
A : akong anta ni nani tabe-rasta ?
(おじいさんはあなたに何をご馳走した?)

(おじいさん) 私 に (さつまいも) と (藤)
B : akong waha ni ngahi to bori ayang tabe-rasta
(おじいさんは私にさつまいもと藤のスープをご馳走してくれました。)

どこまでお分かりでしょうか。赤で示した「mayah」というのは山を表すアタヤル語、akong というのは台湾語（ビンナン語）からの借用です。「akong anta

ni nani tabe-rasta?」は、おじいさんはあなたに何をご馳走したのかということ。「akong waha ni ngahi to bori ayang tabe-rasta」。ngahi はサツマイモのことです。bori というのはツル植物の籐で、ayang はスープです。akong はビンナン語ですが、あとはアタヤル語というふうに、日本語を中心にさまざまな言語が混在している実態がお分かりになったかと思います。

言語分布

下にこの言葉、宜蘭クレオールがどこに分布しているかということを示しました。宜蘭県には、大同郷と南澳郷という2つの郷があります。大同郷の寒溪村、それから南澳郷の東岳村、澳花村、金洋村の合計四つの村でこの言語が使われております。

蘇澳と花蓮を結ぶ全長 118 キロの臨海道路、蘇花公路は、1925 年、日本時代に 14 年間をかけて完成した道路で、この道路の奥に写真1、写真2の村々があります。

写真1は大同郷・寒溪村の風景です。それから、写真2は金洋村の風景です。この2つを含む4つの村でこの言語は話されている。子供たちもしゃべっています。



▲大同郷・寒溪村の風景



▲南澳郷・金洋村の風景

存在確認の経緯とその後

この言語、このクレオールの存在を確認したのは、台湾の国立東華大学の簡月真さんで、2005年に確認しました。その後、2006年に台湾行政院の原住民族委員会がこの言語を「寒溪アヤタル語」と命名しました。台湾ですから、アタヤル語の寒溪方言という形で、アタヤル語に属するものというふうな命名をしたわけです。

2007年に日本語学会でこの新しい言語の存在を初めて報告しました。ただ、研究者はいずれもこの言語をクレオールだと認識しているということもお話したいと思います。

2007年の最初の発表では「日本語クレオール」という話でしたが、2008年に土田滋先生は「日本語ベースのクレオール」と。土田先生はアタヤル語の専門家ですが、やはりクレオールと認定していらっしゃいます。それから、2009年の大谷由紀・黄美金の発表では、“Han-xi Creole”となっています。Han-xiというのは寒溪の中国語ですが、「寒溪クレオール」というふうに呼んでいるわけです。ただ、今お話ししましたように、寒溪だけではなくて、この宜蘭の一部地域ということなので、われわれは2009年以降、2010年の論文から“Yilan Creole”（宜蘭クレオール）と呼んでいます。宜蘭という地域名にちなんだというわけで、あくまで日本語系クレオール語だということです。

クレオール研究の意義

クレオール研究では、言葉がコミュニケーションのニーズに応じてさまざまな姿に変化していく現象を取り扱います。特にクレオール研究は、言語の構造や言語の機能、言語習得、言語変化など、言語の本質に関わる問題の究明に大きく貢献できるだろうと。これまでのクレオール研究では、主に欧米諸語を基盤としたクレオール語が取り上げられていました。日本語が視野に入るといことはほとんどありませんでした。その点で、この日本語系のクレオール語という意味で、宜蘭クレオールの研究は貴重な事例になると思います。

歴史的背景と使用状況

なぜこの言語がこういう形で形成されたのかということですが、最初に申しましたように、アタヤル人とセデック人ですね。1910年代、日本の植民地当局は、山の中に散在していた原住民族を支配しやすいように、集団移住政策をとりはじめます。平野部への移住、コミュニティを平野部につくるということが行われます。そしてこの1910年代から、山間部で日本語教育が初めて本格的に開始されたということです。つまり、日本語に初めて彼らが接していくのが1910年代です。

ただ、アタヤル語とセデック語は、同じアタヤル語群には属するのですが、互いにほとんど通じ合いません。通じ合わない人たちの、日本当局はアタヤルということを一括して、一つのコミュニティに押し込める、と言ってしまおうと何ですが、移住させたということです。しかし、お互いに通じないけれども、教育所では日本語を習っている。その習っている日本語、簡略な日本語をピジンとして使用したと推定するわけです。それ

が1910年代です。

現在調べているところでの使用状況を図1にまとめました。

括弧で示したのは、理解はするけれどもほとんどしゃべれないという言語です。1930～1940年代生まれの人たちは、アタヤル・セデックを理解はできる。ただ、ほとんどしゃべれない。それから、日本語教育で、学校で習う日本語という形で日本語も理解できる。ただ、この世代は宜蘭クレオールを使っているわけです。先ほど申しましたように、もう一つ前の親の世代、この30年代生まれの親世代の運用が問題なのです。多分そこではプレ・クレオールが使われていたと推測するわけです。それがグループ間のリングフランカであると同時に、この地域のアタヤル語とセデック語に取り替わって、それぞれのグループの第一言語になった。その言葉で育った人たちが30年代からということなのです。

1940年代に入りますと、日本が撤退し、中国が台湾に入ってきます。中国語（北京語）が台湾の国語になります。ですから、この世代の人たちは、中国語は聞いて理解できるけれども、ほとんどこのクレオールだけで育っている。1950年代以降、70年代までの人たちは家の中ではクレオールを使い、外ではもちろん国語としての中国語（北京語）を使う。

われわれは、日本語を全く理解できないというか、日本語を知らない50年代生まれの人たちを調査対象にしています。ですから、日本語が混じっているように見えるといっても、それは直接ではなくて、世代的に継承されているものだけということです。現在はほとんど中国語一辺倒になりつつあります。ですから、1980年代以降の人たちは、このクレオールを理解はできるけれどもほとんどしゃべれないというような状況になっているということです。

(図1) 宜蘭クレオールの使用状況

生 年			
1930年代 ～1940年	1940年代 ～1950年	1950年代 ～1970年代	1980年以降
(Atayal / Sediq) (Japanese) Yilan Creole	Yilan Creole (Chinese)	Yilan Creole Chinese	(Yilan Creole) Chinese

() は、全体的に該当言語がほかの言語ほど違われていない、もしくは使えないことを示す。

言語構造

こういう状況ですが、具体的に言語構造の分析を少ししたいと思います。

◆音素

〈子音〉 /p, t, k, ', c, b, s, z, x, g, h, m, n, ng, d, l, r/

〈半母音〉 /w, y/

〈母音〉 /i, e, a, o, u/

◆アクセント

非弁別的：語末の音節、乃至語末から2番目の音節に置かれる。両者で音韻的な対立は存在しない。

※アタヤル語：語末の音節にアクセントが置かれる。

セデック語：語末から2番目の音節にアクセントが置かれる。

まず音韻ですが、音素に分けました。子音、半母音、母音です。子音は17個あります。それから半母音が2つで母音が5つです。この体系そのものはアタヤル語とほぼ同様です。ただ、dという発音は、周辺のアタヤル語には存在しない音です。しかもdで発音されるのは全て日本語からの借用語なので、日本語の干渉で生まれた新しい音素と考えるのですが、この点について詳しいことは省きます。

それから、母音は5つ。これも日本語と非常に似ていますが、例えば日本標準語のuですと、東京などは平口の [ɯ] ですが、ここは丸口の [u] となります。これはやはりアタヤル語の発音（音価）です。アクセントは非弁別的で、後ろから、最後か、最後から二番目が高いということですが、アクセントとして語を弁別するということはありません。これはオーストロネシア系統の言語全体に通じることですが、基本的にこのクレオールは音韻体系はアタヤル語と同様です。

クレオールだと語順が必ず問題になるかと思いますが、アタヤル語の語順はVOSでOS言語です。動詞が一番最初に来る言語です。ただ、周辺はみんなそうなのですが、この四つの村のクレオールはSOVで、日本語と同様の語順になっています。ただ、中にアタヤル語的なVSO構文も存在はします。

もう ご 飯 あなた
taberu mo gohang anta ?

(あなた、もうご飯食べた?)

「taberu mo gohang anta」はtaberuから始まります。moというのは日本語の副詞の「もう」から来ているのですが、これは完了を表します。「あなた、もうご飯食べた?」ということですね。これはVSOです。非常に数は少ないのですが、

それから、日本語でもアタヤル語でもないSVO構文も一部に散見されます。

好き (彼) (を)
wasi ski are ni !

(私は、彼のことが好き!)

「wasi ski are ni」。areというのは第三人称、彼とか彼女です。「私は彼が好きだ」ということですが、これはどういう形で生じたのか。欧米を中心としたクレオールの研究では、クレオールは一般にこういうSVO構文になるというのですが、そういう普遍性を示しているのか、あるいは、いま上にかぶさっている中国語の干渉なのか、これはもう少し分析すべき課題だと思っています。

ちなみに、格標示は、アタヤル語は前置なのですが、日本語は後置です。クレオールは、やはり日本語と同じように後置が非常に多いです。後ろに助詞を持ってくるといえることが多いと思います。そういう意味では、これは非常に日本語に近いでしょう。

語彙

◆基礎語彙の調査結果：

日本語起源の語	一約 65%
アタヤル語起源の語	一約 25%
北京語・閩南語起源の語	一約 10%

◆ 1930年代における南澳地域の人口比率は、アタヤル人 85.7%、セデック人 14.3%である。宜蘭クレオールにセデック語の影響が少ないのは、このようにセデック人がマイノリティであったことが関与していると考えられる。

では、語彙です。東京外大のAA研（アジア・アフリカ言語文化研究所）の基礎語彙調査票を基に調べた結果です。日本語起源、日本語に由来する語が65%を占めています。アタヤル語に由来する語は25%、あとは台湾国語の北京語やピンナン語起源の語が10%ぐらいということになります。やはり圧倒的に日本語が語彙供給言語になっているということが歴然としているかと思います。

セデックとアタヤルの混じり合いと言いましたが、セデック語の影響は今ほとんど見当たりません。1930年代のこの地域の人口比率の統計がありますが、アタヤル人が圧倒的に多かった、セデック人はマイノリティであったということが関与しているのではないかと思います。クレオールだけではなく、この周辺の宜蘭のアタヤル語を使う地域でも同様の傾向が認められます。

まとめますと、アタヤル語が基層 (substrate language) で、日本語は語彙供給言語 (lexifier language) とされるもの、つまり上層 (superstrate language) です。今現在、影響を与えているのは北京語であり、ピンナン語である。中国語であり台湾語である。これは傍層 (adstrate language) と言えます。

例えば日本語にとっては英語が傍層だと思いますが、そういう状況で、それぞれを位置づけできるだろうと思います。

写真3の植物は、日本の桜とはちょっと色が違いますが、sakulaと言います。それから、写真4は tobiyo という魚です。日本語ではトビウオですので、字音語ではありません。この tobiyo は、東岳村の別称でもあります。だから tobiyo 村といえば東岳村のことで、トビウオがたくさん捕れるというところからの命名です。私はいま奈良に住んでいますが、昔、鑑真和尚が日本上陸に何度も挑戦しました。しかし漂流して、南に船が流れていった、そこでトビウオを食べたという記録がありますが、たくさんトビウオが捕れるということです。そのトビウオも日本語から入っているのです。

写真5はちょっと気味が悪いかもしれませんが、ムササビです。yapit、これはアタヤル語そのものです。それから、写真6は衣服で、lukusと言います。これを日本語で言えというのは無理かもしれませんがね。民族衣装的なものです。それを総称して lukus と言うのです。



- ◀ (写真3) sakula (桜)
- ▼ (写真4) tobiyo (飛魚)
- ▲ (写真5) yapit (ムササビ：アタヤル語)
- ▼ (写真6) lukus (衣服：アタヤル語)

(図2) 語彙の置き換え

宜蘭クレオール	日本語	アタヤル語
lukus haku	服を着る	posa lukus
mongpey haku	ズボンを穿く	posa mongpey
kucyu haku	靴を履く	posa kucyu
bosi haku	帽子をかぶる	posa bosi
tokey haku	時計をつける	posa tokey
king haku	指輪をはめる	posa king

unme-zyoto	幸運	myasa-unmey
otoko-no-la'i	男の子	la'i-likuy
cisay-no-la'i	末っ子	uyok-la'i
naka-lukus	下着	lukus-cka cka-lukus

語彙の置き換え(図2)ということですが、まず上の図で言うと、例えば「服を着る」、「ズボンを穿く」、「靴を履く」、「帽子をかぶる」、日本語は「はく」とか「かぶる」、「時計をつける」、「指輪をはめる」と分かれています。クレオールは全て haku です。後ろにアクセントを置いて「lukus haku」、「mongpey haku」。これも非常に面白いです。mongpey が女性用のズボンなのですね。まさに戦前を彷彿させる。もんぺはもともと東北方言で、後に東京に入った言葉です。「kucyu haku」、「bosi haku」、「tokey haku」、「king haku」。king というのは指輪です。

なぜ haku なのかということですが、アタヤル語の方を調べてみますと、アタヤル語はもちろん動詞が先に来ますが、みんな posa で言う。「posa lukus」、「posa mongpey」、「posa kucyu」、「posa bosi」、「posa tokey」、「posa king」。

不思議に思われるかもしれませんが、アタヤル語そのものに日本語が借用されています。そこで日本語由来の haku を posa と置き換えたと考えられます。この辺もクレオールの一般的な状況に非常に似ているかと思えます。

それから、図2の下は語彙の置き換えのもう一つの例です。例えば幸運ということを宜蘭クレオールでは「unme-zyoto」といいます。息子は「otoko-no-la'i」。la'i は子供というアタヤル語です。末っ子は「cisay-no-la'i」です。下着は「naka-lukus」です。これらはアタヤル語が「myasa-unmey」で、美しい、素晴らしい運命。myasa というのは、きれいとか、美しいという言葉

です。「la'i-likuy」、「uyok-la'i」、「lukus-cka」。これらを宜蘭クレオールの語彙に置き換える形で宜蘭クレオールは形成されております。

周辺のアタヤルの村の人たちもこの言語は理解できませんし、われわれ日本人も理解できない。部分的には理解できても、談話をしている場合はほとんど理解できません。先ほどはテキストでお示ししたので分かりやすかったかと思えます。

この言語には、西日本方言要素が使用されています。これは台湾日本語とも関わるところではあります。当時、九州の人たちが圧倒的に多かったということを背景としています。例えば「taru (足りる)」、「oru (いる)」という動詞です。存在動詞は oru で、アスペクト

形式は「-toru (〜トル)。「〜してはいけない」は「-tekang(〜してはあかん)」。それから、否定辞が「-ng」です。ですから、「wasi asta ngasang orang (私は明日、家にはいない)」、orang と言うわけです。「ん」は、標準日本語では「ない」です。訳しましたように、「いない」です。日本語の場合は「ん」というのは西日本方言要素であり、「ない」というのは東日本で標準語だということで区別されているわけですが、実はこのクレオールには「ない」と「ん」が両方使われていまして、そして、それぞれが競り合っております。

文法の再編成

wasi kino nomanay.

(私は昨日飲まなかった)

wasi ima nomanay.

(私は今飲んでいない)

wasi kyo nomang.

(私は今日飲まない)

kino walaxsinay.

(昨日は雨が降らなかった)

ima walaxsinay.

(今は雨が降っていない)

kyo walaxsang rasye.

(今日は雨が降らないだろう)

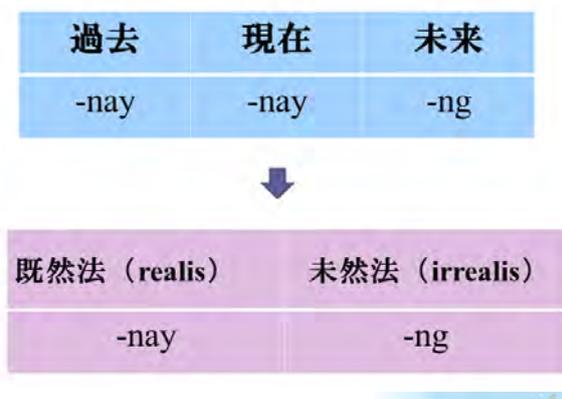
さまざまな文脈で聞いた結果、例えば「私は昨日

「飲まなかった」は「wasi kino nomanay」。ここでは nomang とは言わないのです。今現在も「wasi ima nomanay」で、nomang とは言わない。では「wasi kyo nomang」は「私は今日は飲まない」という決意とか意志を表すのですが、この場合は nomang であって nomanay ではない。

「kino walaxsinay」。walax というのは雨が降ることですが、walaxsuru ではなく walaxsinay、「昨日は雨が降らなかった」。nakatta という形式はありません。副詞を付けることによってテンスを表すわけですが、「ima walaxsinay」は「今は雨が降っていない」ということです。ところが、「今日は雨が降らないだろう」と、推量というか、少し後のことを言うときには、「kyo walaxsang rasye」、ここでは nay にならない。ここにはどういう規則性があるのかと随分悩みました。

パターンとして、過去の「～なかった」とか現在の「～していない」という場合は、ここでは -nay で表し、未来は -ng で表すということです。このパターンについてはさまざま検討したのですが、結論としては、実はアタヤル語を含むオーストロネシア系統の言語は、欧米のようなテンスではなくて、既然法と未然法という枠を持っている。それは、発話の現在より時点が前なのか後ろなのかという点です。

(図3) -nay, -ng に見る規則性



これは日本語の古典の已然形と未然形に似ているかもしれませんが。既然法というのは、その動作が既に行われている、あるいは行われたことを示すもので、今の発話時点よりも前のことを表します。未然ですと、その動作がまだ行われていないということになります。ですから、それはこれからの推量でもあるでしょうし、自分の意志でもある。「kyo nomang」と言ったときには意志にもなるわけです。「kino nomanay」と言ったら「昨日は飲まなかった」ということになるわけです。

そう考えますと、日本語の方言の「ん」と標準語の「ない」をうまく取り込みながら、彼ら独自にアタヤル語の枠の中にこれを持ち込んで、うまくそれを利用したのではないかと。

もともとあったアタヤル語の既然法・未然法という枠組みに、日本語の「ない」と「ん」の2形式を巧みに取り込んで体系化が図られているわけですね。

まとめ

まとめに入ります。宜蘭クレオールは、他の多くのクレオール語と同様に、言語の創造的な再編成プロセスを眼前に見せてくれています。これまでの研究で取り扱われた言語の系統とは全く異なる日本語を語彙供給言語とするクレオールの解明は、接触言語学 (contact linguistics) の研究に貴重な貢献をするものと考えております。時間が来ましたので、私のお話は以上で終わりにいたします。ありがとうございました。(了)



ハワイの近現代と日本語

—1930～40年代の街のくらしから—

原山 浩介 (国立歴史民俗博物館准教授)

はらやま・こうすけ / 京都大学大学院農学研究科生物資源経済学専攻博士課程修了、博士(農学)。国立歴史民俗博物館助手(2005～2011、但し2007から助教)を経て2011年度より現職。

専門分野: 日本現代史。近年、移民史の資料調査・研究を始めている。



今日は防災の日、つまり関東大震災を引き起こした、関東地震が発生した日です。ちょうど今、別の場所で、関東大震災に関するシンポジウムが行われており、私の知り合いも何人か行っています。関東大震災の発生は1923年、つまり今年はちょうど90周年ということになります。

タイトルでは「ハワイの近現代と日本語—1930～40年代の街のくらしから—」ということになっていますが、まずはこの1923年の関東大震災を軸に、話を説き起こしたいと思います。

はじめに—ハワイにおける日本語と日本語放送

さて、写真1でお示ししている『関東大震災とハワイ』は、1980年にハワイで出版されたものです。関東大震災では、ハワイでも、日系人あるいは日本人移民たちが随分と義援金を集めて日本に送りました。

実はこの冊子の後ろに、テレビ朝日の広告が入っています。これは、ハワイには、KIKU-TVというチャンネルがあって、そこで日本の放送局の番組が流れていることと関係しています。現在、このハワイでの日本語放送のプログラムには、日本のニュースやハワイのレストラン・お店の情報などがあり、日本人観光客向けという性格がかなり強くなっています。しかし、移民一世、そのなかでもお年を召した方々にとっては、この放送は日々の生活のなかで非常に大きな意味を持って来ました。

一般的に、「一世」というのは、移住した本人のことを指し、移住先で生まれた子どものことを「二世」、そして代を重ねる毎に「三世」「四世」となります。この定義に従えば、例えば私が来年くらいにハワイに移住すれば、私は「一世」ということになります。しかし通常、「移民史」と呼ばれる分野では、「一世」とは、主に戦前に労働者や農民として海外に移住した人たちのことを指します。そうした人びとの多くは、十分に英語を習得してから移住したわけではありません。

最初の方で機構長や朝日さんからもありましたが、かつて多くの日本人が移住した国や地域に行くと、日本の言葉が残っていることがあります。例えば、英語と日本語が混じったMama San(ママさん)という言葉



▲大久保清編著『関東大震災とハワイ』(ハワイ島移民資料館・ヒロタイムス新聞社、1980)

葉は、料理を形容する際には、アットホームな、とか、手作りの、といった意味で使われることがあります。ハワイで「Mama San Salad」というメニューがあったら、それは通常、「手作りサラダ」というような意味合いになります。

これはとりもなおさず、多くの日本人移民を媒介にした文化的な混淆の結果です。そしてこれは、ハワイの「一世」の生活において、相当程度、日本語が流通していたことも意味しています。さらにそうした「一世」のなかには、生活のなかで日本語が中心であり続けた人びとも多くいます。

つまり、今日、ハワイで日本語のテレビ放送が残っている背景には、日本人観光客が多いからというだけでなく、日本語放送を必要としている日系人の存在という事情があります。かつて、この放送がなくなるかもしれないという危機がありました。これは、「一世」にとっての日常の娯楽の喪失を意味します。この危機をめぐっては、ハワイ大学教授のデニス・オガワ氏が、自らの研究をある程度諦めて、集めた資料は人にあげて、日本語放送を維持するために尽力し、その結果として、今日でも放送が続いているわけです。

関東大震災と中国人労働者、排日移民法

関東大震災の前年、1922年に、横浜で、日本人労働者と中国人労働者のぶつかり合いがありました。港湾労働の仕事を取られてしまうということで、日本人労働者との対立が起っていました。労働市場をめぐってのエスニックグループ間の摩擦は、例えばアメリカ西海岸などでもみられたものです。こうしたことは時として、移民排除の動きにつながることもあります。

そもそも中国人については、単純労働を目的とした日本への入国は認められていませんでした。しかしそれにもかかわらず、実際には、多くの中国人労働者が東京や横浜などにいました。

その背景には、この頃、日本にやってきた中国人労働者に対して、必ずしも強硬な取り締まりが行われていなかったという事情があります。そ

の理由として、もう随分前に定年になられた、横浜市立大学の今井清一先生は、アメリカ合衆国において日本人移民を排除しようとする動きがあったことを挙げています。つまり、日本で中国人移民に対する取り締まりを行うと、アメリカ合衆国の政治家や市民を刺激することになり、アメリカにおける排日運動を加速させてしまう可能性がある、という問題があったわけです。

なお、この中国人たちの労働運動においてリーダー的な存在だった王希天という人物は、関東大震災の混乱のなかで殺されてしまいます。また、この関東大震災の翌1924年に、アメリカ合衆国ではいわゆる「排日移民法」が成立し、日本人労働者のアメリカへの移住が事実上不可能になってしまいます。

ビショップ・ミュージアムの資料

人間文化研究機構の「日本関連在外資料の調査研究」の一環として、ハワイのビショップ・ミュージアムで写真資料の調査を行っています。ここでは、ハワイ王朝を中心としながら、ハワイの歴史を展示している博物館なのですが、移民関係の資料も多く所蔵しており、私たちはそれをウェブアーカイブ化できないかということで仕事をしています。この博物館には、日本語のツアーがあります。ハワイに行く機会がありましたら、ワイキキからは遠いですが、是非、足を向けていただければと思います。

ここに所蔵されている日本人移民と関わる写真について、少しお話ししたいと思います。

移民を表象するときしばしば使われる写真として、お葬式や結婚式の写真があります。ブラジルなど他の地域でも同様ですが、多くの日本人移民が写っ

写真2



▲ビショップ・ミュージアム外観

(図1) ハワイ日系人移民の概略史

ハワイへの移民のはじまり

• 1868年 「元年者」

→ ハワイ総領事ヴァン・リードと江戸幕府による合意。
しかしすぐに「王政復古」、明治政府としては、合意は無効との判断があるものの、強行出発。153名。
翌年、明治政府からの抗議。40名帰国。待遇改善。
1971の日布修好通商条約へ。

• 1885年～1894年 官約移民

→ 1896年 日布移民条約

• 1894年～1900年 私約移民

→ 民間業者による斡旋
→ 1894年 ハワイ王朝→ハワイ共和国
→ 1898年 アメリカでハワイ併合決議、主権の委譲
→ 1900年 アメリカで1900年基本法

自由移民時代から真珠湾攻撃まで

• 1900年 ハワイ基本法施行、契約移民の廃止

→ 自由移民時代へ。

• 1907年 大統領令により、ハワイからアメリカ本土への「転航」禁止。

• 1908年 日米紳士協約

→ 日本からアメリカ合衆国への新規の旅券発給停止。
→ 一旦アメリカから日本に帰国した者の「帰米」、あるいはハワイに住んでいる日本人の家族には旅券が発給される。
→ 「写真花嫁」、アメリカに住む日本人男性が、日本の女性と、写真によるお見合いで婚姻関係を結び、渡航させる。

• 1920年 日本政府が「写真花嫁」への旅券発給を停止。

※紳士協約、「写真花嫁」への旅券発給停止は、いずれも、アメリカにおける日本人移民の増加に対する反感への対応。

• 1924年 アメリカで1924年移民法。

→ 日本では（あるいは日系人の間では）、「排日移民法」と呼ばれている。
→ 南欧・東欧諸国からの入国を制限。
→ 「帰化不能外国人」の移民全面禁止。
→ この結果、日本人は「帰化不能外国人」として、労働者としての入国が不可能になる。
→ 戦前の日本からアメリカへの移民の終焉。

• 1941年12月7日（現地時間）真珠湾攻撃

ているので、説明としては大変わかりやすいものです。ただ、そうした写真だけを見ていると、日本人移民は常に固まって生活していた、日本人移民だけの社会を作ってきたのだという誤解が生じかねないところがあります。もちろん、そうやって人が集まるチャンスはいろいろとあるのですが、しかし必ずしも、普段ずっと日本人だけで生きていたというわけではありません。当然、それぞれの国や地域には、さまざまな経済活動や地域社会があるわけで、様々なエスニックグループの人びととともに生きていました。

そうした姿を写した写真のなかに、少し意外な写真がひとつあります。ハワイで、中国人家族の家政婦をしている日本人が写っている写真です。中国人の方が先にハワイに入っていますので、もちろんそういうこともあり得るわけです。

日本人のハワイ移民の経緯

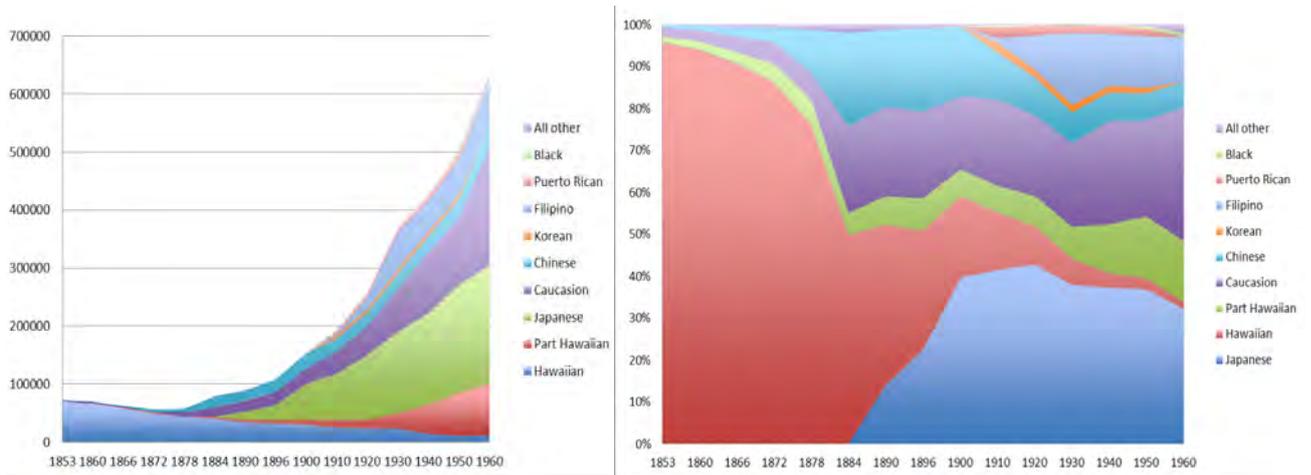
1868（明治元）年にハワイへの移民の第一陣が送り込まれました。しかしこれは単発的なもので、本格的な移住は1885年から始まります。

最初の頃は、いわゆる契約移民で、トウキビ畑の労働者として移住します。3年間は労働者として拘束される代わりに、渡航費用は一応ただになるという建前でした。その後、1900年にハワイにアメリカの法律が適用されるようになると、アメリカの移民に関わる法律と矛盾する、つまり、3年間、人を拘束するような格好で移民を受け入れるのは良くないということで、これは中止になります。

その後、自由移民時代が始まります。移民会社の斡旋や、必ずしもプランテーションの労働者ではない形での移住が進んでいきます。ただ、これはあまり長くは続きません。1908年に日米紳士協約が結ばれると、日本からアメリカ合衆国に労働者として移住しようとする人たちに対する旅券の発給を、日本政府側が、形の上では自主的に停止します。このことで、ハワイへの移住を非常に難しくしていきます。

そしてその後、さきほどお話した、1924年（排日）移民法が成立します。この法律によって、日本人のアメリカへの労働者としての移住は事実上不可能になります。

(図2) ハワイの人口推移



▲ハワイの人口の推移 (1853～1960)

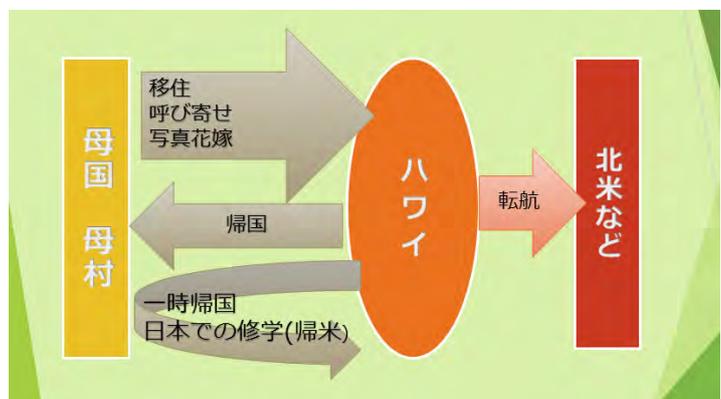
▲ハワイの人口構成比の推移 (1853～1960)

さて、ハワイには、どのくらいの日本人がいたのでしょうか？図2は、エスニックグループ毎の人口を積み上げたグラフです。見ていただくとお分かりになると思うのですが、1880年代半ばから日本人移民が増え、もともとハワイにいたネイティブハワイアンを超えていきます。そして1940年のところを見ていただくと、日本人移民の数は30パーセント台になっています。つまり、人口の3分の1が日本から来た人、ないしはその子孫という状況です。この状態で、真珠湾攻撃を迎えることになります。

ハワイへの移住は、自ら仕事を求めつつ赴いたり、その人が別の人を呼び寄せたり、そして写真を見てお見合いをして相手呼び寄せたりする、といった形になります。ただ、みんながハワイに定着するわけではありません。日本に戻ってくる人、行ったり来たりする人も出てきます。特にハワイの場合は、南米などと比べたらまだ近いですから、そういうことは相対的には起こりやすい地域でもあります。

それから、ハワイで生まれた日系二世の子どもたちが、日本の学校に送り返されて、日本で勉強をして、またハワイに戻ってくるというケースもあります。さらに、ハワイから北米などへ「転航」する人もいます。

(図3) 「ハワイ移民」の動き



日系二世への日本語教育

ハワイへの移住には、このようにいくつかのパターンがあるのですが、しかし日本人移民の人口が増えると、子どもも次第にまとまった数になってきます。そうした子どもたちにどのように教育をするのかというのが、ひとつの課題になってきます。

日本に帰るかもしれないということを想定したり、あるいは子どもに日本語や日本文化を身につけさせようということで、日本語教育が始まります。この日本語学校は、日本人移民・日系人のコミュニティの基盤の一つにもなっていきます。

日本語学校の展開には、幾つかの段階がありました。第一段階は、最初に日本語学校ができたのは1893年といわれていますが、日本人として育てるために日本語学校に通わせる。次のステップは1924年ごろまでで、アメリカへの順応を少し意識しはじめます。

実はこの過程で、日本語学校に批判的な目が向けられるようになり、これは日本人排斥ムードみたいなもの

のと関わってきます。つまり、他者からみると、そもそも日本人移民はハワイ・アメリカに定着する気がないのではないか、というような疑いの目で見られるようになります。そして、アメリカ合衆国に対して忠誠心を持つのではなく、日本の天皇や日本の国家に忠誠を尽くす人たちになっていくのではないかという疑念がわいてきます。そこに、日露戦争で日本が「勝利」したことに対する、黄色人種に対する恐れのようなものが混ざっていくわけです。

1916年に、ハワイでは日本の文部省の教科書の使用を全廃して、独自のハワイの日本語教科書を作るという動きが出てきます。これは、そうした疑いを晴らすためのものです。他方で、外国語学校に対する取り締まりをするというような話も出てくるなかでの、せめぎ合いが起っていきます。1924年の排日移民法の後、裁判闘争が起ります。これは修学年限を限定すべきだという話がハワイで出てきたときに、それは憲法違反であるという訴えるのです。しかし、同時にその裏で教科書の改訂が進められ、全面的に日本語学校の教科書が見直されていきます。

そうして作られた教科書は、日本のものと似ている部分もある一方で、かなりハワイに独特の内容も入っています。例えば、日本語の教科書では、「善良な市民」というところで、「諸子の父祖は、遠く祖国をはなれて太平洋ただ中のこの布哇（ハワイ）に来たのである。多数の諸子は布哇に出生し、布哇県の公立学校に教育せられ、将来米国市民たるべき特権を有せんとしておる」とあります。ハワイはこのとき既に出生地主義ですから、ハワイで生まれた者は自動的にアメリカの国籍を持てるという「特権」があるわけです。そして最後は、「日本民族の長所を忘れず、その美德を保って、さすがは日本民族けいの米国市民であると、米国各人種の間にもそんちょうせられるように心掛けよ。これ諸子が米国につくすゆえんであって、同時にまた、その父祖の国に報いるゆえんである。諸子よ、将来米国市民たるべき諸子よ。諸子は決して父祖の名をけがすことなく、父祖の国の名をはずかしめることがあってはならぬ」と結ばれています。（『日本語讀本 巻6』布哇教育会 1929（『編集復刻版 ハワイ日本語学校教科書集成 第2巻』不二出版、2011、pp.49-50））

ここには、よき日本人として育てようという部分と、アメリカ市民として育てるのだという部分の、両方の意識や可能性が内包されています。1930年代になる

と、日系人の大人たちからも、そろそろアメリカ人になっていくべきなのだという「米化運動」が起こってきます。しかし他方で、「日本男児」として、というようなムードも残ってはいます。その両義性が、教科書にも現れています。

また、1932年の布哇教育会の修身の教師用の指導書には、ちょっと面白いことが書いてあります。「布哇の如き気候風土に恵まれた土地は、とかく忍耐の精神を弱める傾向がある。特に注意を要する」（国立歴史民俗博物館編『<特集展示>アメリカに渡った日本人と戦争の時代』2010、P23）。

こうした両義性を孕みつつも、全体としては、アメリカ市民になるという方向が次第に強く出るようになっていきます。ちなみに、真珠湾攻撃の少し前、1939年の時点では、日本語学校は194校、生徒数3万8500人という非常に大きな数になっていきます。

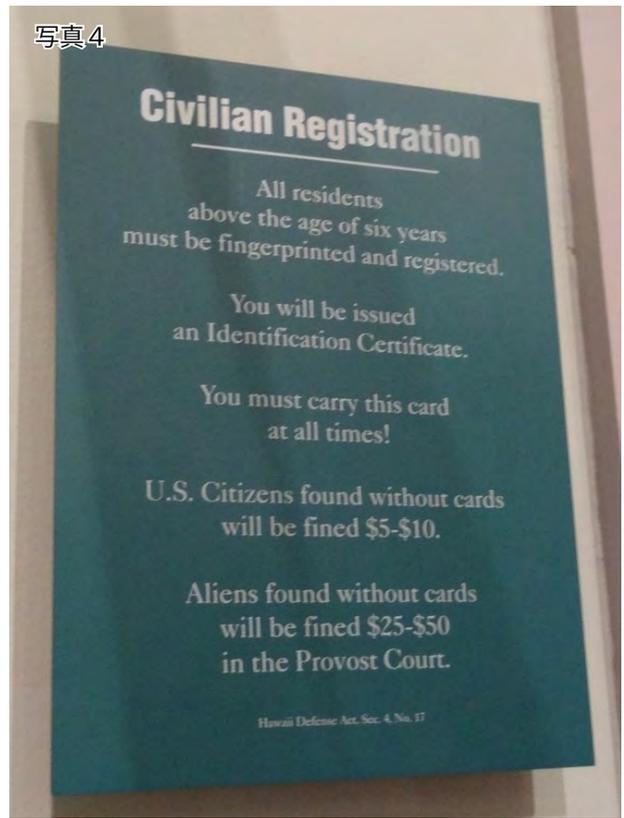
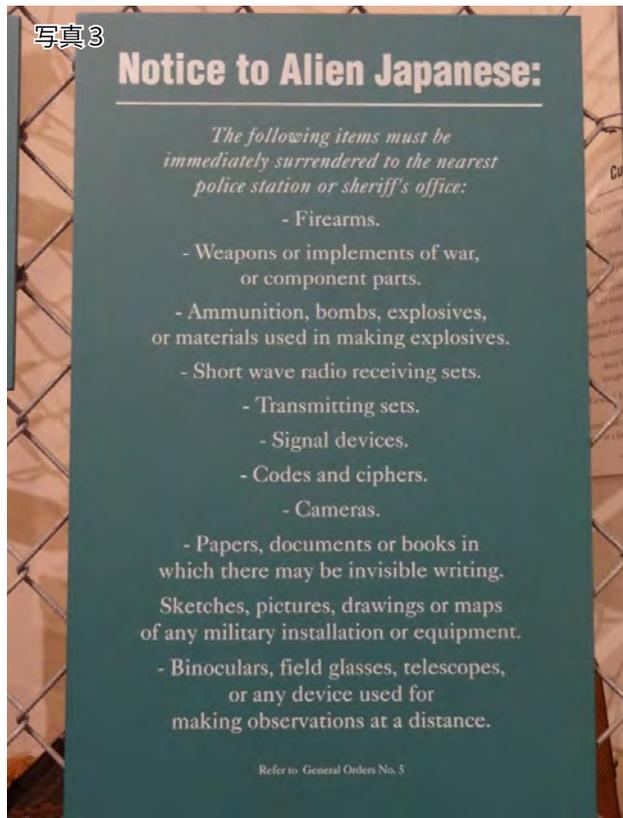
真珠湾攻撃後のハワイ

ハワイでは、19世紀終わりから、日本語新聞が発行され始めました。1895年に『やまと新聞』が創刊、これは後の『日布時事』です。それから1912年創刊の『布哇報知』。このほかにもいくつもの日本語新聞が発行されますが、とりわけ『日布時事』と『布哇報知』は、ハワイの有力な日本語新聞になります。

そして20世紀になると、ハワイの街角には日本語表記の商店が増えていきます。もちろん、日本人だけを相手に商売をしているわけではありませんが、「アイス販売」、「万歳サロン」、「ドクトル風間」などといった表示がでできます。

そうした日本語の看板があり、そして日本語新聞が生き活きと売られているという光景は、真珠湾攻撃を一つの契機として大きく変わっていきます。というのも、ハワイでは日本人・日系人の一部が抑留・収容されるようになります。これは特段、悪いことをしたからということではなく、日本という敵と通じているのではないかと疑いが絡んでいます。

そして戒厳令がしかれ、検閲も行われるようになり、街からは日本語が消えていきます。日本語の看板を外したり、墨を塗っていくというような状況が真珠湾攻撃の後で出てきます。それから、日本語を大きな声で話したり、あるいは盆踊りをやるといったようなことは、非常に難しくなっていきます。つまり、日本人で



▲ (写真3、4) King Kamehameha V Judiciary History Center の展示パネル

あることを大っぴらに表現することがはばかれるような状況が作り出されていきます。

日本語新聞はどうかというと、真珠湾攻撃から数日たった12月12日から発行停止になります。ただ、「一世」の人たちみんなが英語を読むわけではないので、日本語新聞がなくなると情報を得られなくなる人が出てきます。そこでどうするかというと、口コミとか、東京から聞こえてくる短波放送を聞いて情報を得るという、行政にとっては一番ありがたくない方向にいくわけです。そこで、1942年1月には、二つの日本語新聞の発行が許されるようになります。これはハワイの情報部が作った記事を和訳して載せるというものです。そして2月11日には、なぜか社説もハワイの情報部が作る、つまり会社の社説をハワイの行政が作って、それを和訳して載せるということになります。

新聞の作り手は、そこでささやかな抵抗を試みます。例えば記事のなかに、「日本人は指導者ばかりでなくて、国民も敵である。しかし、それは戦争の事実として我々が避け得ないものであるとともに、我々の無視しなければならぬものである」という文章があります。この「無視しなければならぬ」というのは意図的な誤訳で、元の英文には「無視してはならぬものである」

という意味のことが書いてあります。行政はこういう細かな誤訳には気づかないので、そのまま記事になります。また、腹いせに、意図的に分かりにくい和訳をするなどということもありました。

写真2と写真3はハワイの司法博物館(King Kamehameha V Judiciary History Center)の展示パネルです。ここでは戒厳令下の様子が展示されています。日本人は特にラジオやカメラを持つことが禁止されます。それから、島の外への通話は英語でなければいけなくなります。だから、日本語で島の間で通話することはもうできない状況になります。IDカードも携帯せねばならなくなり、持っていない場合の罰金は、外国人の方が高く設定されます。

そういった形で、日本人・日系人の生活は、不自由になり、過剰にアメリカ化した振る舞いをしなければならなくなります。

日系二世、すなわちハワイで生まれた日本人移民の子弟は、ハワイの市民権を持っているため、米軍の軍人として活躍する道がありました。442部隊に入ってヨーロッパ戦線に出ていく、あるいはMIS(Military Intelligence Service)に入って、日本語能力を活かして暗号を解読したり、日本上陸作戦に関わったりする

日系人が出てきます。

MIS で働いた人のなかには、沖縄戦で沖縄に上陸した人もいて、同級生を尋問するはめになるとか、あるいは民間人への攻撃が起ころうとするときに、「ここは私の田舎だから勝手なことをしてはいけない」と言ってみんなを止めるとか、あるいは自ら同郷の人を殺してしまったという悲劇も起ります。最近、この辺りの調査をする人が出て来て、去る 8 月 15 日の NHK ラジオでは、かつて MIS に属していた人の話が放送されました。

日系人は、太平洋戦争に従軍したことによって、アメリカ市民としての自覚を深め、よりアメリカ化していったのだと言われることが多いのですが、ラジオに出演した方は、「私はアメリカになんて全然忠誠心はなかった。ただ、アメリカの兵士になって沖縄に行くか、あるいはアメリカで強制収容されるか、どちらかを選ばなければいけないと考えて、自分は兵士として沖縄に行った」ということを話していました。そして沖縄では、同級生がたくさんいて、その人たちを尋問して、というようなお話をされていました。

この MIS の存在は、日本史のなかでもこれまであまりきちんと取り上げてきませんでした。この部分をもう少し掘り下げていくと、戦争というものの見え方がもう少し変わってくるかもしれないと思います。

まとめ

ここまで、ハワイという場所を中心に、日本語、そして日本人移民・日系人の生活の変容をお話してきました。日本語を使うか、それとも英語を使うか、という選択は、単なる語学力や生活習慣の問題ではすまされない部分があります。つまり、時として日本語を使うこと、あるいは英語を使うことが、それだけで、非常に政治的な意味を持ってしまい、真珠湾攻撃以降は、日本語を使っていたことが原因で逮捕されるというようなことも起ってきます。

ただ、これは何も日本とハワイ、あるいは日本とアメリカだけの話ではなくて、それぞれの社会で、移民といわれる人たちに降りかかる問題でもあります。自らがもともと持っていた言語を使うのか使わないのか、子どもたちに言葉を継承させるのかさせないのか、といったことは、日常生活の問題でありつつも、同時に政治的な問題に発展するものでもあります。そこには、純粋に子どもたちに文化を伝えたいということだけでは済まされない、社会状況とのせめぎ合いが介在します。

言語とは、単純な文化の問題ではなく、母国語と外国語というだけの問題でもない、つまり、社会的、あるいは政治的な問題を孕むものでもある、ということ、旅行に行った時、外国人を前にした時に、思い起こしていただければと思います。(了)



海を渡った日本語と音楽

—パラオの歌を事例に—

小西 潤子 (沖縄県立芸術大学教授)

こにし・じゅんこ / 大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了、博士 (文学)。

静岡大学教育学部准教授、同教授を経て、2013年より現職。

専門分野：民族音楽学 (旧南洋諸島を中心とするオセアニアの音楽文化研究)



今日はいろいろなテーマのお話が続いています
今が、私はパラオでうたわれている日本語混じりの歌をご紹介しますと思います。

パラオと異文化接触

パラオは、フィリピンの南西、インドネシアの北にある独立国です (図1)。面積はちょうど屋久島ぐらいで、人口は約2万人です。屋久島は人口1万3千人くらいなので、パラオよりは人口が少ないですね。この辺りの地域が、戦前に日本の植民地下にあった旧南洋群島です。ちなみに、旧南洋群島と言われて、皆さんはピンとくるでしょうか。戦前生まれの方だったら親しみのある所なのですが、私のような世代になりますと、ぼつんぼつんと島々が点在するというイメージです。

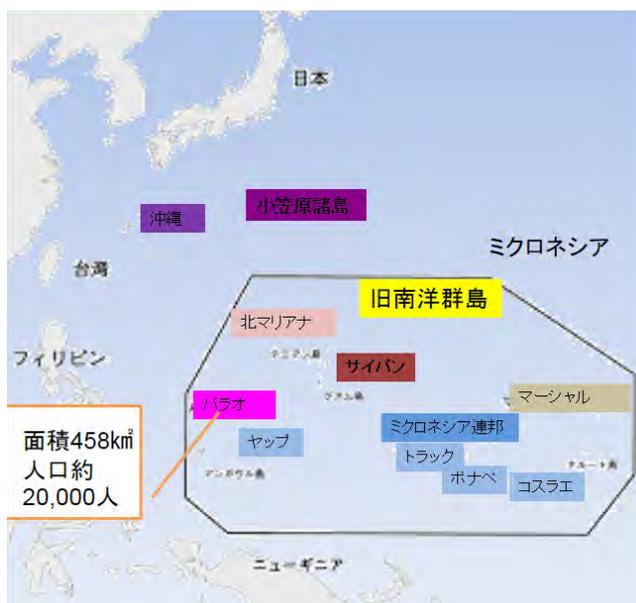
戦前は、日本の植民地ということで、海路で盛んに行き来がありました。パラオには南洋庁という、この地域を管轄する役所がおかれ、旧南洋群島の中でも特に栄えていました。サイパンにもたくさんの日本人、とりわけ沖縄から、たくさんの人々が渡りました。

パラオの異文化接触の歴史について、簡単にご紹介したいと思います。18世紀の終わりぐらいに西洋の船が訪れるようになる時代を経て、1885年にスペインがまず領土にします。スペインの影響として今残っているのは、キリスト教です。この頃から、南洋群島地域でヨーロッパとの接触が本格化します。

次に、ドイツが入ってきます。スペインからド

イツに切り替わる時は、ドイツの船がやってきて旗を立てて、「今日からドイツになります」と、島の人々を無視したような形で支配する側が変わりました。ドイツ時代には、コブラ (ヤシ油の原料) などの貿易が盛んに行われました。

西洋と接触した結果、私が「行進踊り」と呼んでいる芸能が旧南洋群島で生まれました。19世紀末から20世紀の初頭にかけてです。そして、第一次世界大戦から第二次世界大戦間の時代に、この地域は日本の統治下におかれました。日本時代に特徴的なのは、インフラの整備が進んで物質文化、大衆文化がたくさん入ったことです。それから、学校制度によって島の子どものための学校が作られて、日本語を公用語とする徹底的な教育が行われました。



(図1) 旧南洋群島とパラオ



▲日本語歌謡教授の様子（小西撮影）

今日お話するパラオの日本語混じりの歌——私が「日本語歌謡」と言っているものは、日本の影響を受けながら日本語を部分的に用いたものや、かなり多くの部分が日本語から成り立っているような歌のことで、そういう歌が1920年代以降に成立し、1960年代頃まで非常に盛んにうたわれ、今でも引き継がれています。

戦後は旧南洋群島はアメリカの統治下におかれて、アメリカの消費文化が入り、若い世代になると英語を話すようになっていきます。その後、パラオは1994年に独立国となります。

写真1は、ハワード・チャールズ准教授が、パラオ・コミュニティ・カレッジの学生に日本語歌謡を教えている風景です。教育現場でも伝承されているということです。

次に、ガラスマオの滝という観光地で出会った40歳前後の男性が、たまたま「日本語の歌がうたえるよ」とうたった歌です。映像を見ていただきたいと思います。



【音声】《アルミの仕事》より（抜粋）

クリックすると音声流れます。音量にご注意ください。

この方は、観光地で働いていることもあって片言の日本語もできるのですが、この歌は完全に覚えていました。《アルミの仕事》という歌です。日本語でうたっている部分を聴きとっていただけたいでしょうか。こういう歌が、英語世代の比較的若い方にも引き継がれています。

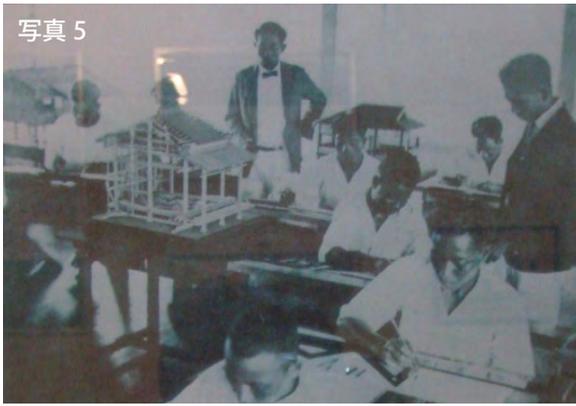
旧南洋群島では同じように日本語教育が行われたのですが、地域によっては平均寿命が短かったりして、もうほとんど日本語を話せる世代の方がいないという事情もあります。パラオの場合は旧南洋群島の中でも、特に日本語歌謡が多く残っています。

当時の様子を紹介する写真を持ってきました。写真2は、公学校で島の子どもたちが運動場で並んでいるところです。先生は、日本本土から赴任してきました。運動会や学芸会などの学校行事も行われていました。写真3の看板には「伊豆屋パン」と書いてあります。これがコロールの本通りで、日本人の商店がたくさんあります。写真4は長野時計店とありますが、た



▲（写真2）公学校での朝礼（ベラウ国立博物館提供）
▶（写真3）コロール本通り（同博物館提供）
▶（写真4）日本人が経営する商店（同博物館提供）





▲(写真5) 木工徒弟養成所の様子 (ペラウ国立博物館提供)

くさんの日本の物がパラオに入っていたことがわかります。

公学校は3年間プラス補習科2年、最大で5年間でした。特に優秀な男子生徒は、木工徒弟養成所に進みました。大工さんを養成する専門学校です(写真5)。パラオにしかおかれていなかったのも、他の島々、トラックやポナペといった周辺の島々からの生徒たちも、この学校に来ました。実は、南洋群島はそれぞれの言語がみんな異なるのです。彼らがパラオに来て、コミュニケーションをとる手段として、日本語が共通言語になりました。

日本語歌謡の成立

先ほどの長野時計店の写真で中の様子を見ますと、ギターがずらっと並んでいます(写真6)。1930～1940年代といいますと、日本でも《酒は涙か溜息か》などの古賀メロディをギターでつま弾くというのが若者の間ではやりましたが、パラオでも同じようでした。日本人だけでなく、パラオの人たちも耳にしていたわけです。日本の流行歌が、ほとんど時間差なしに入り込んでいたのです。これは、パラオにもともとあった伝統的な歌とは音楽的には全然違うものです。パラオの伝統的な歌を日本の学生が聴いて、「お経みたいだ」と言うこともあるのですが、「馬子唄」のように長く音を伸ばしながら唱えるものだったのです。日本の歌がどんどん入ってきて、パラオにも日本的な歌のとらえ方が広まっていったのです。

日本とパラオ、あるいは南洋群島で、共通して同じ音楽が聴かれるようになったとはいえ、その土台となると多少違うところもあります。一つは、パラオや旧南洋群島の島々には音楽産業というものが存在



▲(写真6) パラオで販売されていた楽器 (同博物館提供)

しません。日本の場合には、商業的に売るためにプロの作曲家が作曲するシステムがあります。ところが、パラオの場合は歌を売るシステムがなく、またうたうことを専業とする歌手もいませんでした。ですから、当時日本語歌謡は、青年の集会やローカルなラジオ番組で普及したのです。パラオの歌は、人々の生活や感情を直接反映したものであって、民謡や民族音楽に近いようなものなのです。

これからご紹介させていただく日本語歌謡も、そういうものだと思っていただけたらよいと思います。

替え歌からオリジナルの日本語歌謡の創作まで

次の段階では、替え歌が作られるようになっていきます。事例1はパラオの隣のヤップ島のものです。パラオと交流のある島なのですが、こちらには《肉弾三勇士の歌》という日本の歌が入ってきました。これが《一晩兄貴のうちに寝る》という替え歌になったのです。どういう歌かと申しますと、「今晚は家に帰らないから、大丈夫、放っておいてね」というような意味です。元歌は軍事色の非常に強い歌だったものが、日常的な歌に変わっています。

【事例1】「ひとばん兄貴のうちに寝る」

ひとばん 兄貴の うちに寝る
 グ安心 カウグモル マグベ チンシャ
 オボスコ ファロフェンニ
 リバグレニフェン
 グモルグモル ニ グベ うれしい

【事例2】「コロールの5丁目」

*作詞作曲：Elnis Nutuik（トラック出身）

1. コロールの5丁目にいる
かわいい娘さん とてもかわいい笑顔で
僕がにらむ時は ちょっと笑う顔つきで
なんだか恥ずかしい
2. 向き合うあのところで
話してみたい ところが会うときには
はなしができません 君の心かげんが
僕に知りたいな
3. ときどきあなた様が出かけるときに
化粧ばかりじゃないが その後ろ腰には
見ただけで ほんとに
寝るに寝られない

【事例3】「アルミの仕事」(歌詞抜粋)

*出典：Chelitakel 'R Belau volume2, p.16

ARUMI NO SINGOTO UA HIOBANG A KEBRUKA.
SAIRENG NO STIZI KI HAZIMA RA SINGOTO.

【事例4】「Kimeta」

*日本語訳 H. Kingzio

1. まちがったことによって、
今もとどおりにかえりました。
だから私が心の中で後悔しているのは、
あなたのよいやり方です。

(Chorus)
ただあなただけが、
私たちを困らせて苦労させて困らせた。
私は境目に落ちて、誰も助けてくれなかった。
きめた、きめた、身体がだるくなってきた。
2. 私たちの約束を考えてみたら、
心の痛みが出てくる。
私の望みは、いずれ機会があれば
お目にかかりましょう。
3. さようなら、わたしの心を傷つけたあなた。
私の最後の言葉は、あの世であなたに知らせる。

さらに、日本の歌の曲調をモデルにした新しい曲が作られます。その事例としてご紹介するのが「コロールの5丁目」という歌です(事例2)。実は「コロールの5丁目」はパラオの人が作曲した歌ではありません。さきほどご紹介した木工徒弟養成所に勉強に来ていたトラックという島の人が、パラオのお嬢さんに一目ぼれしちゃったという歌なのです。自分の愛の気持ちを伝えるのに、共通語の日本語で作ったのです。

「かわいい娘さん とてもかわいい笑顔で 僕がにらむときは」とありますが、普通だったら、僕は「にらむ」のではなくて「見つめる」はずですね。「君の心かげんが 僕に知りたいな」「化粧ばかりじゃないが その後ろ腰には」もちょっと日本語としてはおかしいですね。

こういう歌を旧南洋群島の人たちが作っていたのです。しかも、それがまた日本語ですから、日本にも伝えられてきているのです。日本人が旧南洋群島でこれを聴いて、覚えて帰ってきたのです。これが小笠原に伝わった例を聴いていただきたいと思います。



【音声】[《パラオの5丁目》\(小笠原 ver\)](#)

このように口伝で伝わってきますので、少し歌詞が変わってきた部分があります。日本語歌謡を日本人が聴いて日本に輸入したのです。このような歌が小笠原や沖縄などにも伝わり、行進踊りという芸能と一緒に普及しているものもあります。先ほど聴いていただいた「アルミの仕事」という歌は、ローマ字表記されています(事例3)。先ほどの歌では「ヒヨワン」、この歌詞では「HIOBANG(ヒオバン)」となっていますが、もともとは「評判」でした。それから「KEBRUKA(ケブルカー)」とうたっていました。これは当時アルミの採鉱所がパラオに造られて、そこで掘り出したアルミをケーブルカーで運んでいたという仕事の歌です。歌詞の「STIZI KI」の「KI」、「HAZIMA RA」の「RA」もパラオ語で、ちょっと混ざっています。だんだん若い世代に伝わっていくと、日本語がわからないので、少しずつ変化してきて、元の日本語の意味もだんだん分からなくなっているというのが現状です。

パラオでは、戦後の日本の歌の替え歌もうたわれています。たとえば、「Kimeta」という歌があります(事例4)。

元歌の「きめた きめた おまえと道づれに」とい

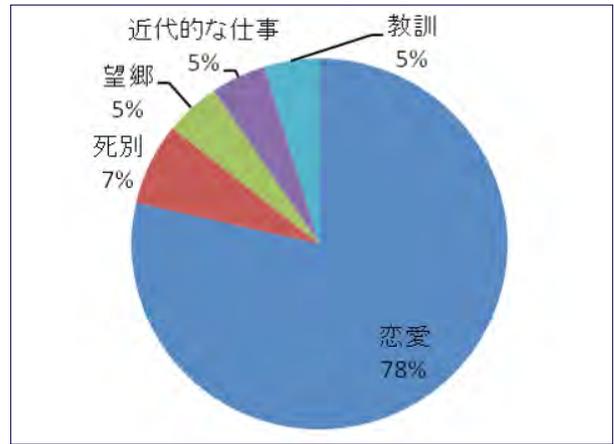
う歌詞の「きめた」がタイトルになっていて、日本語は「きめた」という部分だけです。このように、日本語の使用頻度がだんだん限られて、単語レベルになっているものもあるのです。

歌詞の内容としては、「だけどあなただけが、私たちを困らせて苦労させた…きめた、きめた」のように翻訳できます。元歌は「おまえとみちづれに一生生きましようね」という歌だったのですが、「きめた」という覚悟の内容が全く変わってしまった替え歌になっています。替え歌を作るときに、パラオの人は日本語の意味も分かっているのですが、それを曲解したり無視したりして、自分たちの都合のよいように使ったりする場合もあるという例です。

また、パラオでは日本語歌謡が写真7のように個人のコレクションとして、たくさんため込まれています。特に年長の女性の方などは、自分のお財布の中にこういう歌詞をいっぱい入れていたり、あるいはノートに書いていたりします。しかし、それをみんなで共有するというシステムはありません。というのは、もともとパラオでは、歌は個人の財産だったからです。

みんなでシェアするという発想ではなく、むしろ自分の歌が財産であるという感覚でした。しかし、この方々がだんだん高齢化していく中で、私たちが歌詞の書き留めなどに協力しているところです。

写真8は、沖縄出身の日系人の方が「避難場便り」という歌をひらがなと漢字の混ざった日本語で書き留めたものです。歌詞を作ったのは、日系パラオ人です。「なつかし古巣の避難場便り 切れてはかない縁の糸うすい灯りがほのかに燃えて 読むは未練のうらない



【図2】パラオの日本語歌謡のテーマ分類 (42 曲)

か」という、ものすごく素敵な日本語です。これをパラオの人が当時書いていたのです。

では、なぜパラオで日本語歌謡かということですが、「日本語を使った方がパラオ語よりも歌に当てはめやすい」という答えが返ってきます。音節の関係で、たとえば“cheldechule”というパラオ語を日本語で「仕方がない」と言った方が歌には合うというのです。

日本語歌謡の社会的意味

図2のように、私が日本語歌謡を調べた中では、8割近くが恋愛の歌です。しかも、パラオではこういう歌が民謡のように流布しているわけです。恋愛の歌といっても、恋愛して嬉しいというよりは、ほとんどが悲恋や恨みのような、とても怖い恋愛歌なのです。「Oyano yurusanu (親の許さぬ)」という歌 (事例5) の歌詞を見ながら聴いていただけたらと思います。



写真7

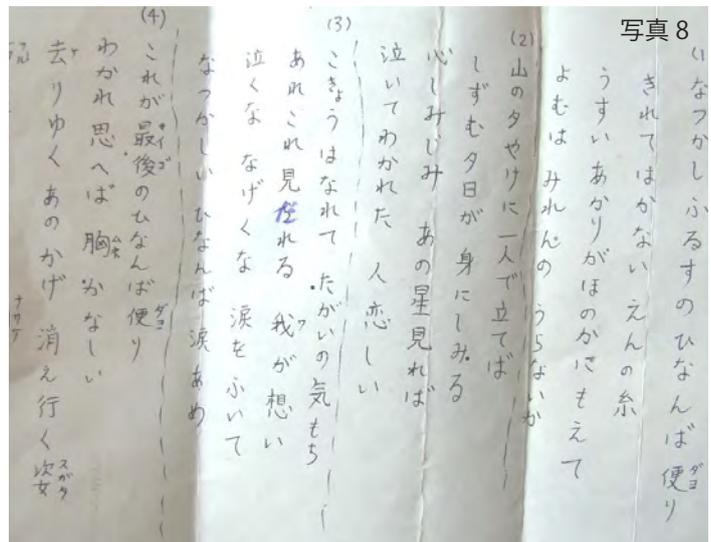


写真8

- ▲ (写真7) 歌詞を書き留めたウタホン (小西撮影)
- ▶ (写真8) 日本語歌謡「避難場便り」の歌詞 (同)

【事例5】「Oyano yurusanu」（歌詞抜粋）

*出典：Chelitakel 'R Belau volume2, p.17.

(日本語訳 H. Kingzio)

1. Oyano yurusanu hutari no koi wa,
makdi chelitang edi mengebuul ra wanga
uchi hitori nayamu.

(結婚する気持ちだったけれども 親が許さないから
私は苦しみながら 自分の家でひとり悩んでいる)

4. Bechesiil rasech ra armesiich,
meng diobesbeso chelebuul,
le kau ia tar chosakd a reng lechad,
meng diak dibom chubur chebulang.

(ちょっと名高い家の家族の生まれだから
人の悩みを知らない 苦しみも知らない)

5. Mechikung sayonara mlemelemii
a rengum era mebong, edim chitak
eme kungedeyau ra a wanga semai kono sima.

(さよなら さよなら
あなたの目的を楽しみなさい 希望のように
私は狭い島でブラブラするばかり)



【音声】 << Oyano yurusanu >>より (抜粋)

これは、親が許さないから苦しみながら家で一人で悩んでいるという歌です。この歌詞に対して、曲調は

明る過ぎて「何か南国風のすごく楽しそうな歌だな」と思って聴いてしまいます。ところが、実はとても怖い恨み歌で、最後にはこの主人公は死を決するぐらいなのです。5番の歌詞は、「さよなら さよなら あなたの目的を楽しみなさい」となっています。実はこの中では、パラオの社会的関係についてうたわれています。1960年代に作られた歌なのですが、「これは最後の痛み」「もうこれで死ぬ」ということも示唆する怖い歌です。こういう歌を作ることがどういう意味があるかということになってきます。歌を作ったことは、その人の人生経験を伝えるということ、自分が死んでも歌が生きるのです。しばしば実名とかイニシャル、恨み相手の名前も出てきます。誰が誰のことを想ったものなのか、聴いているみんなも分かることが多いわけです。だから、歌の主人公の親族がもしその歌を聴いていたら、お礼の気持ちからうたっている人にお金を払ったりします。

“Oyano yurusanu”のような歌詞は、日本語を理解して解釈した上で作られるのですが、日本の歌とちょっと違うのは、それが民衆の生の声だということです。そのメッセージはパラオの社会と文化に根ざしているのです。つまり、パラオではこういう恋は許されないのだというようなことを伝えているわけです。

パラオの日本語歌謡は、日本語の新しさ、あるいは日本語の持つ表現性を取り入れつつも、パラオにおける伝統的な歌の社会的な機能と、パラオの精神文化を継承しているのです。

ちょっと駆け足になりましたが、以上で終了させていただきます。ありがとうございました。(了)



日系人と日本語

移住先国における日本語の受容と変容

小嶋 茂 (早稲田大学移民エスニック文化研究所 招聘研究員／海外移住資料館学芸担当)



こじま・しげる／ブラジルへの学部留学を経て、パラナ連邦大学（ブラジル）大学院歴史科社会史修士課程修了。10年間のブラジル滞在をきっかけに移民に関心をもち、アメリカ大陸における日系人のアイデンティティやエスニックコミュニティの変遷を調査研究している。大学勤務を経て JICA 横浜 海外移住資料館の設立に関わり、現在に至る。
 専門分野：移民研究（移民史やマツリ・エスニックタウン・食などのテーマを中心として研究）

並 段は横浜のみなとみらい地区にある海外移住資料館という所で仕事をしておりますが、早稲田大学の移民・エスニック文化研究所の招聘研究員としても先生方と一緒に調査研究をさせていただいています。

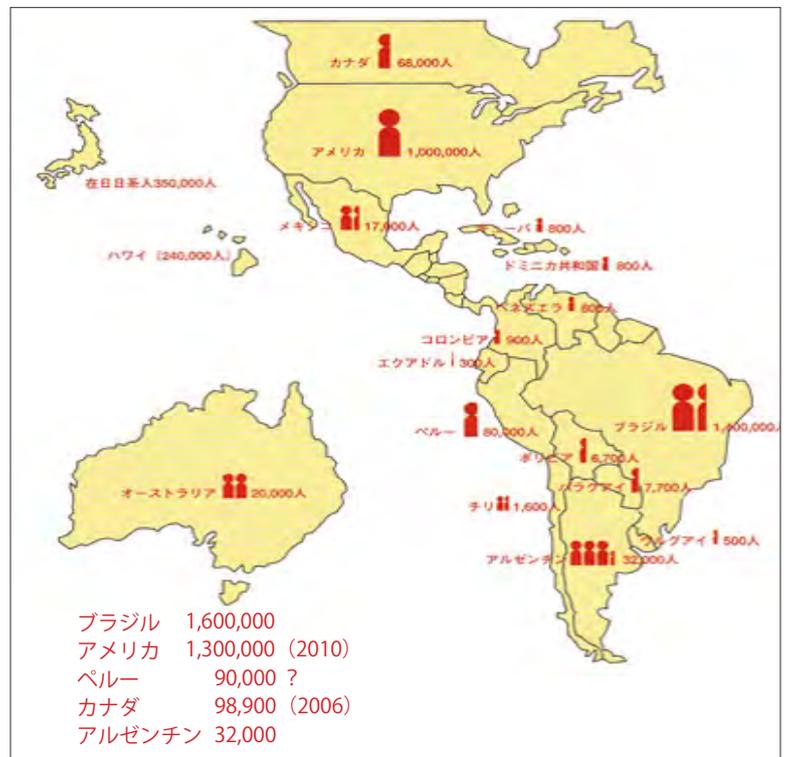
私の専門が移民研究ですので、今日は「日系人（移住者とその子孫の方々）と日本語」というテーマで、エピソードを幾つかご紹介したいと思います。

まず基礎知識として、日系人と呼ばれる人たちがどれくらいいるかということですが、今、全世界でおよそ 300 万人といわれています。ブラジルが一番多くて 160 万人、続いてアメリカが 130 万人、さらに、ペルー、カナダ、アルゼンチンと続きます（図 1）。

北米においては、センサスである程度正確な数がはじき出されるのですが、南米では日系人がどれくらいいるかという調査は行われていません。ブラジルですと、50 周年とか、80 周年の周年事業のときにかなり正確な調査を行っているのですが、その数が分かるのですが、現在はその 80 周年に行ったときの数を基に、どれくらいの数であるかということ推測しているに過ぎません。

ふいし、かんかん？

最初にご紹介するのは、ハワイに渡った日本人女性のインタビューです。ロサンゼルスにある全米日系人



(図 1) 日系人の分布 (公益財団法人海外日系人協会ウェブサイトより)

博物館という所が 1960 年代に日系人の方々をインタビューしています。そのインタビューの一つを、1 分ほどですが、これから見ていただきたいと思います。

(会場：ビデオ上映)

今の映像の最後のところで、この一世のおばあちゃんが傍らにいるお孫さんに向かって「ふいし・かんかん、ふいし・かんかん」と言っていると思うのですが、これを聞いたときに一体何を言っているのだろうか

ということが分からずに、ずっと疑問に思ってきたのですね。このインタビューは、全米日系人博物館で録画されたのですが、かなり前のことなので、全米日系人博物館の方もどういう状況で誰がということが把握できていないような状況です。

横浜の居留地、現在の関内は、日本が開国して最初に外国人がやって来たところで、そこでは日本人と外国人が共存して、一緒に生活していたという事実がありました。そこで話されていた横濱言葉というものがあつたそうです。その居留地で、外国人と日本人の間でいろいろなコミュニケーションがなされていく中で、いわば共通語のような形として出来上がっていった。

今、その横濱言葉の辞典とまではいかないのですが、語彙が記録されています。ここに幾つかご紹介します。1864年に出された出版物の中に「To think」が「とう・しーん」、「To cry」が「とう・からい」、「girl」が「げいろ」、「cloth」が「げろうす」、dogが「どうけ」、「change」が「ちんちん」、「count」が「かんかん」と書いてあります。

さらに4年たった後、girlが「げいろ」から「げへる」、clothの「げろうす」が「ころーせい」、dogの「どうけ」が「どぐ」と少しずつ変わっているのですが、ここに「fish」が「ふいし」と出てくるのです。あと面白いのが、「Come along」というのが「かめろん」、

これはよく理解できるかと思います。一番面白いのは、「What is the matter with you?」という英語が「おす・まだ・よう」と書いてあるのです。確かに What is the matter with you? を非常に早く発音すると「おす・まだ・よう」のように聞こえてきませんか。

この頃はまだ辞書がない時代です。日本で最初の和英辞典は、1867年にヘボン式で有名なヘップバーンという方が作ったものです。それ以前の辞書がない時代に、耳で聞いた言葉をどう表すかということで作られたのが、今ご紹介した単語集のようなものだったわけです。

これを見て、先ほどの「ふいし・かんかん」というのは、「お魚、何匹いる?」というように、お孫さんに向かって池にいた魚のことを「数えてごらん」と言っているのではないかというのが私の今のところの結論です。それが正しいかどうかは100%の確証を持って言えませんが、今日はこちらにいろいろな専門家の方もいらっしゃると思いますので、もしご存じの方がいらっしゃったらご教示いただきたいと思います。

ということになると、横浜で話されていた横濱言葉というものをハワイに渡った移民の方が受け継いでいたということになるのではないかという仮説を持っています。

「オニブスをつかむ」

次はブラジルのお話です。ブラジルではコロニア語というものがよく知られています。一部の方は、ポルトガル語で日本語のことをジャポネース、ポルトガル語はポルトゲースといいますので、その両方の言葉が混じっているという関係で、ジャポンゲースとか、あるいは二世語という言い方をすることもあります。

戦争が終わって、日系人は日本に帰国することができなくなって、ブラジル社会で生きていくことを大勢の人が決意せざるを得なくなったわけですが、現在私たちがブラジル日系社会と呼ぶ自分たちのコミュニティのことを、当時は日系コロニアと呼んでいました。コロニアというのは英語のコロニーに相当する言葉ですが、現在までも引き続き使われています(図2)。

日本人としてのアイデンティティを維持している方々、および日本との深いつながりを持っている方々の中で、自分たちのコミュニティをコロニアといっている人たちがいるわけです。そのコロニアで話されて

横浜港崎町伊勢屋幸吉版「横浜みやげ」

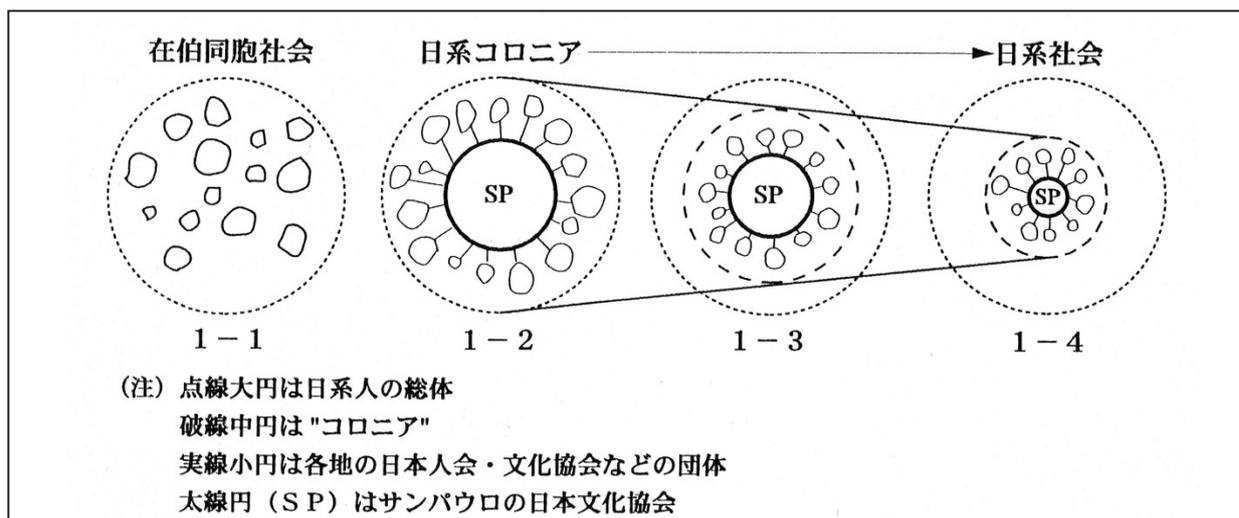
(元治(1864)年7月刊)

おもふ	とう・しーん	To think
なく	とう・くらい	To cry
女郎	げいろ	girl
きもの	げろうす	cloth
いぬ	どうけ	dog
両かいするを	ちんちん	change
貫目するを	かんかん	count

「外国商通 ことば附」(明治元(1868)年刊)

おんな	げへる	girl
きもの	ころーせい	cloth
いぬ	どぐ	dog
さかな	ふいし	fish
同伴し来れ	かめろん	Come along
何事だい	おす・まだ・よう	What is the matter with you?

(図2) ブラジル日系社会の名称から見た変遷 (小嶋作成)



いた言葉ということでコロニア語といわれています。

図3に幾つか例があるのですが、イラストの上の方に書いてある文章を読みますと、「セノーラは小さくコルタして、アスーカをすこしシンコミヌットだけコズイニャして」。これはポルトガル語が分かる方は理解できると思うのですが、「セノーラ」というのはニンジンです。「コルタして」というのはカットする、「アスーカ」というのは砂糖、「シンコミヌット」は5分、「コズイニャ」は「調理する」という意味です。だから、「ニンジンをお小さくカットして、お砂糖を少し入れて、5分間調理してください」ということなのですが、これをコロニア語で話すとこんな形になるということです。



(図3) 「オニブスをつかむ」～コロニア語の例 (「サンパウロ新聞」1998.4.1 付記事をもとに作成)

その他によく使われる言い方として幾つかここに例を示しました。「オニブスをつかむ」。「オニブス」というのはポルトガル語でバスで、要するにバスに乗るということです。それから、「野球を投げる」は、野球をするということです。ポルトガル語で「jogar beisebol」、「beisebol」は野球、「jogar」は、するという意味にも使えますので、プレーするという意味にもなるのですが、投げるという意味を第一義的に使いますので、これをコロニアの方々には「野球を投げる」。同じように「テニスを投げる」と言います。

あるいは「Eu tomo café」、私はコーヒーを飲みますと言うときに「ヨウはカフェにする」。この「Eu」というのを日系の方が発音したときに「ヨウ」というような言い方をされることがあって、私もこれを最初に聞いたときには分からなくて、「ヨウはカフェにする」と、その方は殿様なのだろうかと思ったりしたのですが、「ヨウ」は私という意味だったのです。

それから、同じように「トーマ・カフェする (tomar café)」はコーヒーを飲むという意味です。「jantar」は夕食を取る。これも、ジャンタしますか、夕食をしますかというような言い方をします。

- オニブスをつかむ = tomar ônibus
- 野球を投げる = jogar beisebol
- テニスを投げる = jogar tênis
- ヨウはカフェにする = Eu tomo café.
- トーマ・カフェする = tomar café
- ジャンタする = jantar
- この通りをまっすぐ行くと、ヴァルガス大通りに落ちます = Indo direto nessa rua, vai cair na Av. Getulio Vargas.

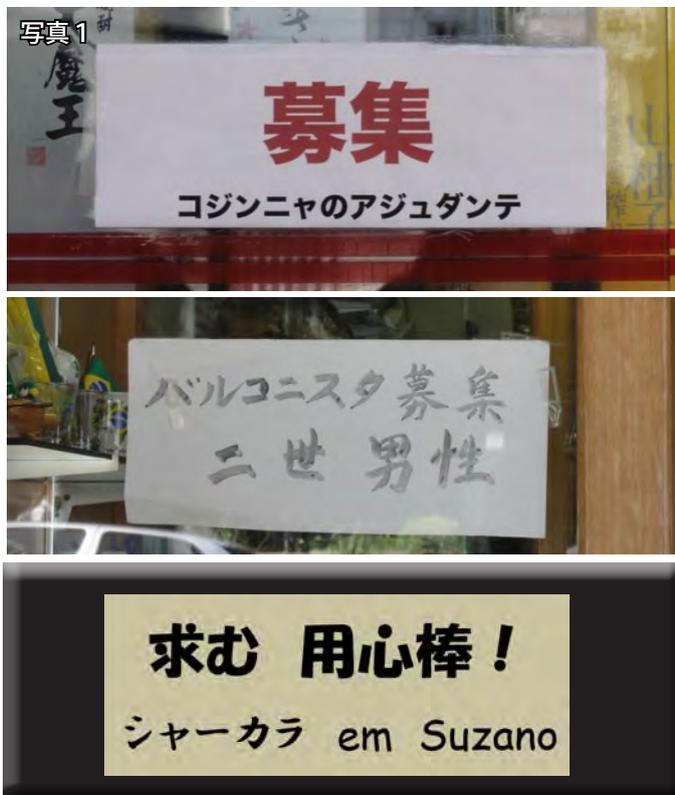
それから、面白いのは、「この通りをまっすぐ行くと、ヴァルガス大通りに落ちます」。道を聞いたときにこんな返事が返ってくることもあるのです。「ヴァルガス大通りに落ちます」と言われると、大丈夫だろうかと心配になってしまいます(笑)。これは、「落ちる」という動詞にポルトガル語では「cair」という動詞を使っていて、「その通りに着きます」という意味なのですが、それをそのまま直訳した関係で「落ちます」になってしまうのです。

現地では、こういった日本語とポルトガル語がミックスされた言葉がいまだに使われています。例えば、ブラジルの一世の方々を中心に「ブラジル俳句」と呼ばれる俳句が作られているのですが、その俳句の中にもポルトガル語がそのまま入っている例があります。

ブラジル俳句

『ブラジル歳時記』(佐藤牛童子、2006.10刊)から抜粋

蜜柑もぐ吾子のノイバは大女(青柳 清流子)
 出稼に荒れサビア鳴くゴヤバ園(新津 稚鷗)
 茎漬やマモンを漬けし日も遠く(樋口 敏明)
 シマロンは南伯産の新マテ茶(加藤 すま)
 シュベイロの湯ざめ侘びしく思ひ寝る(念腹)



▲ブラジル街角で見かけたコロンビア語掲示

左の1番目、「蜜柑もぐ吾子のノイバは大女」。「ノイバ」は花嫁という意味です。それから、最後の「シュベイロの湯冷め侘びしく思ひ寝る」。「シュベイロ」というのはシャワーという意味です。こういうふうには、言葉の一部にポルトガル語が入っています。

「はろ吉」と「ルキケチ」

現在でも、日系人がたくさん集中しているブラジルの地域に行きますと、このような掲示がよく見られます。写真1は先ほど朝日先生のお話にもありましたが、私も朝日先生と一緒にブラジルから帰ってきたばかりで、つい先週、撮影してきたものです。

左側には「募集、コジンニャのアジュダント」、「コジンニャ」というのは台所(キッチン)です。「アジュダント」は助けてくれる人、助手という意味です。右側には「バルコニスタ募集 二世男性」と書いてあります。「バルコニスタ」は店員です。

それから、これは残念ながら私は映像を持っていません。この掲示を見たときにカメラを持っていなかったのが写真は撮れていないのですが、あまりにも面白かったので、はっきり覚えています。「求む 用心棒!

シャーカラ em Suzano」。何のことだろうと思いました。「Suzano」というのは日系人がたくさんいるところの地名で、「シャーカラ」というのは小農園です。

「用心棒」というと、ちょっと危ないのではないか、何が起ころのだろうというような気がします。ただ、これはよく考えてみるとあり得ることで、日系人の方が日本に出稼ぎに来ることを決めたときに、自分が持っている別荘のような小農園を誰かに見てもらう必要があるわけです。誰かに託さなければいけない。ところが、もし見てくれる人がしっかりしていないと、ブラジルにはいろいろな問題があって、留守の間に盗られたりしてしまうことがあるのです。あるいは場合によっては、物騒な話ですけれども、銃を持っている人たちがやって来て、そこにいる人を殺して、その家を盗られてしまうということもあり得るので、そういうことも面倒を見ることができるガードマンのような人を募集している。そういう人をポルトガル語



▲ (写真2、3) リベルダージの「ルキケチ」と「ヨグチ」

で guarda というのですが、それが「用心棒」という日本語に変わっているのです。

リベルダージというかつての日本人街、今でも日本人街と呼ばれていますが、そこに実際にあるお店の看板を見てみます。

まずは写真2、「ルキケチ」です。日本語しか分からない方は、当然「ルキケチ」という言葉に目が行くはずで、これは何のことだろうと思うわけですが、「ルキケチ」の上に英語で「LUCKY CAT」と書いてあります。「ルキケチ」の下には、具体的には「BOLSAS(バッグ類)」、「PRESENTES (プレゼント類)」、「PAPELARIA (文房具店)」。要するに、このお店は雑貨店です。文房具類とか、いろいろな雑貨を売っているお店で、お店の名前が「ルキケチ」なのです。

なぜ「ルキケチ」なのかというと、Lucky Cat をブラジル人が発音すると、「ルキケチ」となるのです。それを日本語にそのまま音訳して、カタカナで「ルキケチ」になったということです。これは日本語しか分からない日本人の方のために親切心でこういう名前を書いてくれていると思うのですが、最初は何のことだと思えます。ブラジルのポルトガル語やブラジル人の発音のことが分からない人には、ちょっと理解できない表現だと思います。

写真3には「YoGuTi」と書いてありますが、これも同じです。この下に英語で「it's frozen yogurt!」と

書いてあることから、ヨーグルトのことだろうと想像がつくのですが、ポルトガル語でヨーグルトのことを「ヨグチ」と発音するのです。ですから、それがカタカナになって「ヨグチ」になったということで、非常に面白い変化をしているということが分かります。

こういった例はたくさんあって、例えばキティちゃん、ブラジル人が発音すると、「ハロ・キチ」になるのです。はろ吉という名前にも聞こえます。「Yakult」も、現地では「ヤクルチ」と発音します。ブラジルでは語尾の子音の後に母音の i が付く傾向があるからですが、こうした私たちが最初に聞いただけでは分からないような変化が起こっているということです。

これは何もブラジルにおける日系人の話だけではなくて、逆バージョンもあります。ここは余談ですが、全日本サッカーの元監督で、「Zico (ズィッコ)」という方がいました。ところが、日本ではなぜか「ジーコ」になりました。英語発音を聞いた日本の方が、その英語発音を日本語に訳すと「ジーコ」になるので「ジーコ」になってしまったと思うのですが、もともとは「Zico」なのです。

もう一つ面白いのは、現在は日本のいろいろなパン屋さんでも売られている、ピンポン玉かもうちょっと大きいくらいのが一般的な「ボン・デ・ケージョ」。これは日本語に訳すと「ブラジル風のチーズパン」です。ポルトガル語で発音するとパオン・デ・ケージョ



▲日本語を取り入れた店名の数々

です。「ケージョ」はチーズ、パオンは、皆さんご存じ、ポルトガル語から日本語に入ったパンのことなのです。もともとはパンとしてポルトガル語から日本語に入っているにもかかわらず、現在ではパンではなくて、「ポン」になってしまったのです。いろいろなところでこういった音に関する面白い現象が見られます。

Umai-do, Sushi Kudasai

その他に、ブラジルやアメリカといった日本人移民が渡ったところに行くと、ここ10年くらいの傾向だと思いますが、お店の名前に日本語を取り入れているお店がたくさん出てきているのです。ここで幾つかご紹介したいと思います（写真4）。

一つはシアトルにある「UMAI-DO」、ウマイ・ドゥではなくて、ウマイ・ドーです。「UMAI-DO」はシアトルにある日系三世の方が経営している和菓子店の名前です。和菓子がおいしいからという意味が込められていると思います。

このUmaiという言葉は、アメリカだけではなくて、ブラジルのクリチーバというところでも、パステル店の名前でUmaiと付けられています。恐らく他にもまだあると思います。

次の「Medatsu」というのは、サンパウロにある日系二世の方が経営している眼鏡屋さんです。まさに目と関係があるということで「Medatsu」になっているのかと思います。

それから極めつきといえますか、これも最初に看板だけ見たときには何のことかなと思いました。「SUSHI KUDASAI」。このお店は日系人ではなくて、韓国系の方が経営しているお店でした。チェーン店で、いろいろなところがありました。話をお伺いしたかったのですが、ちょっと時間がなくてお話しできませんでした。今、ブラジルやアメリカをはじめとして、日本食、特に寿司や刺身が非常に流行しています。

そのきっかけは、食品関係の方々の間では非常によく知られていることなのですが、アメリカの上院で特別委員会が実施した食に関する報告書、マクガバン・レポートというものが1977年に出されるのですが、そのレポートの中で、日本食というものが非常に健康的で、理想的な食事である、われわれはもっと日本食に学ぶべきだというような報告が出され、それが影響して、アメリカ国内で日本食が非常に広まってきました。そして、ブラジルにもそれが飛び火する形で、最初はインテリの方々日本食を食べるようになり、どんどん広がっていったと言われています。

そういう影響もあって、ブラジルのサンパウロでは、日本でいうと紀伊国屋や三省堂のような大きな本屋の中にあるコーヒーショップで、買う前の本を読みながらコーヒーを飲んだりサンドイッチをつまんだりすることができるのですが、そのサンドイッチと一緒に寿司が並んでいるのです（写真5）。ですから、寿司をつまみながらコーヒーを飲んで、どの本を買おうか考えることができるのです。それくらい寿司とい



写真5



▲ブラジルに根づく寿司文化



写真6

▲ふじりんご (Maçã Fuji) とカキ (Tomate caqui)



写真7

▲キュウリ (Pepino japonês) とナス (Berinjela japonesa)

うものがブラジル人の食生活の中に溶け込んでいるということです。

ふじりんご、柿、ダイコン…

さらにブラジルにおける日本語という面では、ブラジルにおいてもアメリカにおいても、日系人の貢献ということと非常に密接な関係があります。ここにご紹介します、写真6の左側は「Maçã Fuji (ふじりんご)」です。右側は「Tomate caqui」と書いてあります。トマトの中にはいろいろな種類があって、ブラジルのトマトの中に「Tomate caqui」があります。「caqui」というのは「柿」です。その柿のような甘い、おいしいトマトということです。これらは共に日系人が導入して、しだいにブラジル人の生活の中に溶け込んでいったものです。

この二つだけではなくて、まだまだたくさんあります。例えば写真7左側の「Pepino japonês」。「Pepino」はキュウリです。右側は「Berinjela japonesa」で、

「Berinjela」はナスです。それぞれ「japonês」、「japonesa」、男性名詞と女性名詞という関係があって語尾がちょっと違いますが、「日本の」という形容詞が付いていて、これはブラジル人にとっては新しい品種です。日本人が持ち込んで、ブラジルの食生活の中に溶け込んでいったということで、農業分野における日系人の貢献というものを如実に表しています。こういった言葉が日常生活の中で散見されるわけです。

これはアメリカも同じです。写真8はアメリカのシアトルのスーパーマーケットで見たものです。「Daikon」、「Hosui」は梨の豊水です。「Satoimo」、「Gobo」、「Nagaimo」という日本語がそのまま表記されています。こういった現象が起こっているのは、ここ10年、20年くらいでしょうか。かつては現地の言葉で書いてあって、横に説明的な表現があることはありましたが、日本語がそのまま出ているということはありませんでした。ともかく最近では、それだけ一般の方々に親しまれながら、その生活の中に溶け込んできたということが言えると思います。



▲シアトルのスーパーマーケットにて。野菜の名前に残る日本語の影響

さらに、日系人の中で根強く残っている習慣、例えばタクワンです。写真9左の広告は少し前のものになりますが、ハワイで作られたタクワンがアメリカ本土に輸出されていました。日本語は一切書いていないのですが、ローマ字で「TAKUWAN」と書いてあって、下の方には「KO-KO」と書いてあります。「KO-KO」というのは、一定の年齢以上の方はすぐに分かると思いますが、香という字を続けて書いて「香々」、香りの

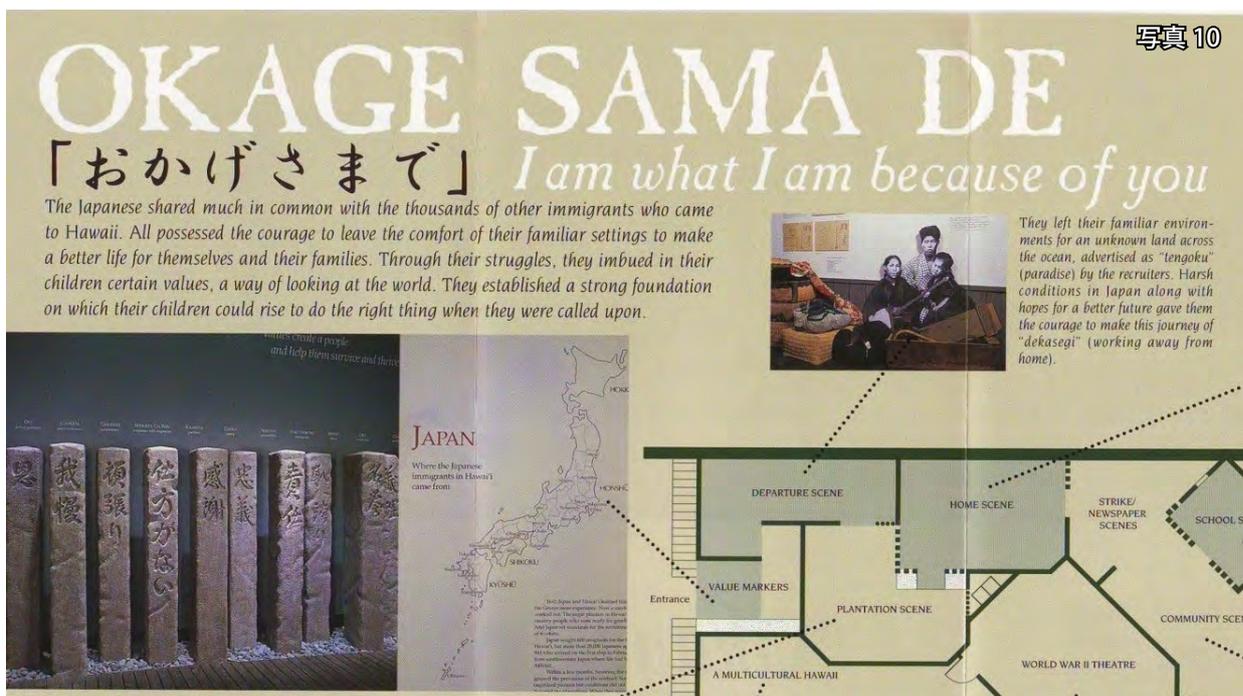
もの、漬物という意味です。これがタクワンを指すことも多かったわけです。現在でもハワイでたくさんタクワンが作られていて、TAKUWAN とそのままラベルに書いてあります。

それから、下にある豆腐も、和菓子と並んで現在いろいろなところで作られています。中には日系人ではなくて、非日系の方が受け継いで作っているところも多く、豆腐というものが非常に一般的に消費されるようになってきたという現実があります。



▲ハワイ産のタクワン (TAKUWAN) と、現地でもおなじみになった豆腐 (TOFU)





▲ハワイ日本文化センターのリーフレットに見る日本の心、「おかげさまで (I am what I am because of you)」

“Okage sama de”

日本人移民が持ち込んだ文化が一番根強く残っているのがハワイおよびブラジルであると言われているのですが、今、写真 10 でお示ししているのは、ハワイにある日本文化センターという小さな博物館のリーフレットです。これを見ていただくと、大きくローマ字で「OKAGE SAMA DE」、そして、ひらがなで「おかげさまで」と書いてあります。右側の英語に注目してみると、「おかげさまで」の英訳が「I am what I am because of you」となっています。

この「おかげさまで」、それから、その他に幾つか日本語がここに並んでいるのですが、ハワイの二世の方々は一世の方々から、こういった言葉を日本人としての重要な文化、価値観として習ってきたわけです。その中で一番象徴的な言葉が「おかげさま」であり、その「おかげさまで」というのは「I am what I am because of you」であると。

日本の和英辞書で「おかげさまで」という単語を引くと、恐らく Thanks to god とかいう意味が一番一般的で、多分この「I am what I am because of you」という訳は載っていないと思いますが、ハワイの日系人の方はこのように捉えているわけです。「おかげさまで」というのは、あなたがいるからこそ、現在の私がいるのですという感謝の気持ちです。人は一人で生き

ているのではなくて、親、家族、先生、地域の方々、いろいろな方々にお世話になった。そのお世話になったことに対して、感謝の気持ちを素直に感じ、伝えることができる。それが「おかげさまで」という言葉に象徴される重要な価値観です。その重要な価値観を、アメリカの日系人の方々、特にハワイの方々の中には、次の世代に自分たちの文化遺産として伝えていきたいということで、たとえ日本語を話せなくても「おかげさまで」という言葉ははぜひ伝えていきたいという人たちがいらっしゃるのです。

ポルトガル語の語彙に見る日本語

ブラジルの話に戻ります。これも先週ブラジルに行ってきたときに分かったことで、最新のデータです。場合によってはブラジル語という言い方をすることもあります。ブラジルの言葉はポルトガル語です。2006年、サンパウロに Museu da Língua Portuguesa (ポルトガル語博物館) ができたのですが、その一つのコーナーに、さまざまな移民がブラジルに持ち込んだ文化が、日常生活のポルトガル語の語彙の中にどのように影響を与えているかということを紹介しているコーナーがあったのです。

その移民の中には、当然のことながら日本人移民に関するデータもあります。そこには「bonsai」、



▲▼シアトルの公設市場（写真11）と、クリチーバの市営市場（写真12）にある壁画。ともに農業生産分野における日系人の貢献を今に伝える。



「camicase」、「caraoquê」、「caratê」、「dekasségui」、「jiu-jitsu」、「judô」、「nissei」、「samurai」、「saquê」、「sushi」、こういった言葉が出てきます。これらの言葉は、直接および間接的にみんな移民と関係があります。

食ということに関しては、先ほどお話ししたように、アメリカのマクガバン報告書というものがそのきっかけであったことは事実ですが、その後、日本にやって来た出稼ぎの人たちなどがブラジルに戻ってレストランを開くといったことも、非常に大きな影響を与えていますので、これらの言葉は、やはり全て直接的・間接的に移民と非常に関係があるということが言えると思います。

日系人の貢献

こういった言葉というものは、ブラジルの場合は移民が持ち込んだものです。それから、移民ではなくて外国からの影響というのものもあるわけですが、それは必ずしも言葉だけで伝えられるわけではなくて、ここに二つお伝えしようと思います。

写真 11 はシアトルの公設市場にある壁画です。入り口に近づいていくと、「FARMER'S MARKET」とあって、中がちょっと暗くなっていますが、マーケットには5枚ほどの絵が掛かっています。その中に、こんな絵があるのです。

これは全て日系人がかつて第二次世界大戦以前にこのマーケットで仕事をしていた、あるいはこのマーケットに持ち込んだ野菜を近郊で生産していたということを表している絵なのです。この両脇に解説があって、「この公設市場には、戦前は日本人がたくさんい

ました。しかし、第二次世界大戦が起こって、強制収容されて、みんな収容所に入れられてしまいました。戦後は日系人は一人もいません。しかし、かつてはここには日系人がたくさんいて、ここで仕事をしていました」とあります。このように、日本人移民の農業分野における貢献を顕彰する形で絵画が飾られています。

同じように、ブラジルのクリチーバの市営市場では、中に入るとこのようなボックスがあって、大勢の方々が野菜や果物、あるいは穀類とか、いろいろなものを売っています。そのフードコートにタイル画が描かれています。写真 12 の絵です。

真ん中にひげを生やしたおじいちゃんがありますが、この方は実在の日本人移住者一世の方です。既にお亡くなりになっていますけれども。ここはそのおじいちゃんが持っていたフルーツのボックスです。クリチーバはパラナ州の州都なのですが、パラナ州を象徴する木があって、そこに指を指しています。これは非常に有名な「さあ行かう 一家をあげて南米へ」というブラジルへの移住を募集したときの有名なポスターがあって、言ってみればそれをパクっているのですが、パラナ州へ日本人移民がたくさんやって来たということ象徴的に表しているわけです。こういった壁画が市営市場に飾られています。

日本人がどれだけ貢献したかということが、絵画としても残されているということで、移民という存在が、アメリカとブラジルの両国において非常に重要な役割を果たしているということが、言葉の面からも日常生活の中からも、非常によく分かるということになります。ありがとうございました。



米国日系人の言語使用

—カタカナ表記の『揺れ』を中心に—

森本 豊富 (早稲田大学教授)

もりもと・とよみ/カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA) 大学院教育学研究科博士課程比較国際教育学専攻修了、Ph.D。

駿河台大学経済学部専任講師、同助教授、早稲田大学人間科学部助教授を経て、1999年4月より現職。

専門分野：移民研究 (日系移民の言語・文化維持、トランスナショナルな移民の個人史、在外日系移民関連資料の保存・整理・活用)

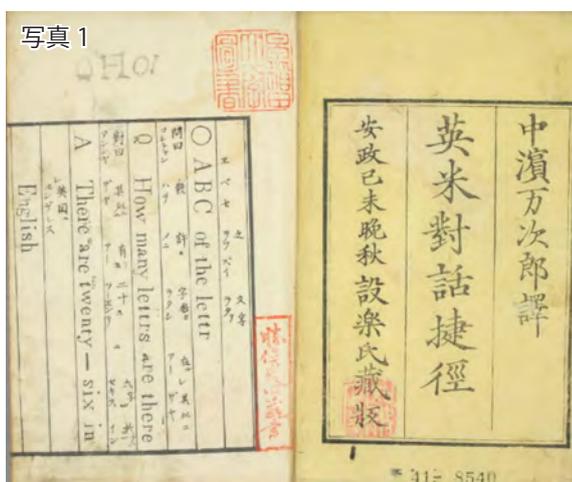


写真1
▲『英米対話捷徑』
(安政己未晩秋設楽氏蔵版早稲田大学図書館所蔵)

今日皆さんはこれまで、台湾、ハワイ、パラオ、ブラジルと巡ってこられたわけですが、最後にアメリカに寄って、世界を一周して日本に帰るといような感じになるかと思います。やや細かい話にはなりますが、アメリカの日系人の言語使用ということで、そのカタカナ表記について見てみたいと思います。アメリカに渡った人物ということでよく取り上げられるのがジョン万次郎 (中濱萬次郎) ですが、中濱萬次郎は1859年に『英米対話捷徑』という本を出しました。これは日本における英会話本の最初とも言われています。「捷徑」というのは速習といいますが、早く習うことのできる英会話の本という意味です。

今日はまずその話から入りまして、その後カタカナ表記の揺れ、そして、本調査で対象とした資料を紹介して、最後に『庭園』という雑誌のカタカナ表記について詳しく見てみたいと思います。

『英米対話捷徑』のカタカナ表記

写真1が『英米対話捷徑』で、左側が最初のページです。「エベセ ヲフ ズイ ラタァ」とカタカナが振ってあります。カタカナ表記で読みが書いてあるわけです。

次のカタカナ表記を英語で書いてみてくださいと、悪い癖で、教壇に立つとすぐにテストしてみたくなるのですが、頭の中でもちょっと考えてみてくださいでしょうか。

これを英語で表すとすると、どういう表記になるか。いきなり答えを言うのではなくて、皆さん、ちょっと考えていただきたいと思います。2番がちょっと長くて、どこで区切るかで理解が違ってくるかと思います。

- (1) アーユーカメン = ?
- (2) ユー スパーカ エンケレセ プロテ ウワエル = ?
- (3) ヘディキ = ?
- (4) モーネン = ?
- (5) チリレン = ?

……………

答えです。「アーユーカメン」は「Are you coming?」です。そして、「ユー スパーカ エンケレセ プロテ ウワエル」は「You speak English pretty well.」です。「ヘディキ」は「headache/hédèik/」です。「モーネン」は「morning/m'ɔ:niŋ | m'ɔ:n-/、そして、「チリレン」は「children /tʃildrən/」ということです。日本語式に発音すると何を言っているのか分かりませんが、早く発音してみると、むしろ英語の原音に近い

ということが分かると思います。例えばモーネンと言うと、すごく英語らしく聞こえますし、チリレンと言うと children ということになるわけです。

中濱萬次郎は当然、英語を知らずにアメリカに渡って、漂流の結果、自分の意思ではありませんが、最初に留学した日本人といわれています。アメリカの東海岸の方に10年ずっと滞在していたわけではなくて、捕鯨船に助けられて行ったので、捕鯨をしながらいろいろ巡ってはいるのですが、その捕鯨船の中ではずっと英語漬けの状態、10年間日本を離れていました。

そして、日本に帰ってきて、それをカタカナ表記するところということになります。土佐の出身ですので、多少土佐弁の影響もあるようですし、あるいは東海岸の英語の影響も多少あるようです。

この他にも、例えば語尾の接尾辞が、先ほど紹介した「モーネン/モオネン (morning)」、あるいは「カメン (coming)」、「ノーイン (knowing)」、「ゴエン (going)」、あるいは「チャインジ (changed)」、g や d は発音しないわけです。「begins」も「ビキン」で終わっています。また、日本語の「イ」と英語のつづりの「i」というのは必ずしも同じではなくて、やや「エ」に近い音になることが多い。ということで、「カメン」になったり、「ゴエン」になったり、「プレテ (pretty)」になるということです。

あるいは、「hot」の「o」の発音が「ハート」、「ア」と「オ」の中間音のようところでまた表記が違ってくるといようなことがあります。そういうことが「u」についても言えるし、あるいは、日本語の場合は二重母音を長母音で表記することが多いのですが、しっかりと二重母音が表れるように changed 「チャインジ」という表記をしたりしているわけです。

カタカナ表記の「揺れ」

「揺れ」ということでいいますと、日本語音韻の範囲での揺れがまずあります(図1)。例えば「コンピューター」と書くのか「コンピュータ」と書くのか。同様に「ヒットラー」なのか「ヒトラー」なのか。「チャンネル」なのか「チャネル」なのか。こういうことを日本語の中での表記の「揺れ」というのですが、それが起きているわけです。

日本語の中に入っている外来語の外来音韻が絡むものでいうと、「スィーズン」なのか「シーズン」なのか。

(図1) カタカナ表記の「揺れ」

◆日本語音韻の範囲での「揺れ」

- (1) 長音の有無 (コンピューター・コンピュータ)
- (2) 促音の有無 (ヒットラー・ヒトラー)
- (3) 撥音の有無 (チャンネル・チャネル)
- (4) 長音、促音の別 (アベレージ・アベレッジ)
- (5) 二重母音、長音の別 (レインコート・レーンコート)
- (6) 「ア」「ヤ」の別 (ロシア・ロシヤ)
- (7) 「ク」「キ」の別 (インク・インキ)

◆外来音韻がからむ「揺れ」

- (1) 「スイ (ズイ)」使用の有無 (スィーズン・シーズン)
- (2) 「ティ (デイ)」使用の有無 (ティーム・チーム)
- (3) 「トゥ (ドゥ)」使用の有無 (アントゥーカー・アンツーカー)
- (4) 「ツイ」使用の有無 (ベネツィア・ベネチア)
- (5) 「ファ (フィ、フェ、フォ、ファ、フュ、フヨ)」使用の有無 (テレフォン・テレホン)
- (6) 「ヴ」使用の有無 (ヴェール・ベール)
- (7) 「イエ」使用の有無 (イエロー・イエロー)
- (8) 「キエ (ギエ)」使用の有無 (キェルキラ・ケルキラ)
- (9) 「シェ (ジェ)」使用の有無 (ロサンジェルズ・ロサンゼルス)
- (10) 「テュ (デュ)」使用の有無 (テューバ・チューバ)
- (11) 「ニエ」使用の有無 (ニエンチエンタングラ・ニエンチエンタングラ)
- (12) 「ヒエ (ビエ)」使用の有無 (ライヒェンバハ・ライヘンバハ)
- (13) 「ミエ」使用の有無 (ミューサ・ミューサ)
- (14) 「ウァ (ウィ、ウエ、ウオ)」使用の有無 (ウィーク・ウイーク)
- (15) 「ワ (ウァ、ウイ、ウエ、ウオ)、ヴァ (ヴィ、ヴェ、ヴォ)」使用の有無 (ワーグナー・ヴァーグナー)
- (16) 「クァ (クイ、クエ、クオ)、グァ (グイ、グエ、グオ)」使用の有無 (クイーン・クイーン)
- (17) 「ン」「ニ」、「ヌイ」「ニー」の別 (カザン・カザニ)
- (18) 二重母音・短母音の別 (グラウンド・グランド)
- (19) 綴り字発音の有無 (グローブ・グラブ)
- (20) 耳ことば・目ことばの別 (プリン・プディング)
- (21) 清音・濁音の別 (ギブス・ギブス)
- (22) 「ツ」・促音の別 (ウオツカ・ウオッカ)
- (23) 「シ」・「シュ」の別 (シミーズ・シュミーズ)
- (24) 原語・その他の言語 (ゴシック (英)・ゴチック (独))

がやはり原音にかなり近いところで表記されているということが分かります。

ポテトは「ポテトー」、キャベツは /k'æbɪdʒ / に近い「キャベーチ」、トマトも「トメトー」です。ビールも「ビーア」と書いてありますし、オニオンも「アニオン」ですね。そして、スイートポテトも「スウキートポテトー」、それから「アップリカット」というような例が見受けられます。その他にも「ナショナルシチイ」とか「ナショナルシテイ」、あるいはレイクサイドの代わりに「レーキサイド」という表記が目立ちます。

[2] 戦中一強制収容所から

北米の日系人の収容所は何種類かあります(図3)。「集結センター(Assembly Centers)」というのは、内陸部分にある「再定住センター(Relocation Centers)」というところに本格的に移動する前の仮の収容所のことです。つまり、いきなり何もなしの砂漠に1万人の町を作り上げるものですから、そのためのキャンプの施設の準備をするわけで、その間に待っている仮の収容所が必要だったのです。

その他に、コミュニティのリーダーたちがまず捕らえられて、「敵性外国人収容所(Enemy Alien Internment Camps)」というところに入れられました。例えば日本語学校の先生であるとか、ジャーナリストであるとか、そういった人たちが収容されたところでした。

アメリカの南部にも収容所があって、ローワーはアーカンソー州にありました。写真3はトラックに乗ってこれから収容所に向かうところですが、「ツラッ

カー」と書いてあります。トラックではなくて「ツラッカー」というカタカナ表記になっています。

(図2) 『羅府年鑑』内のカタカナ表記

▶農産物名

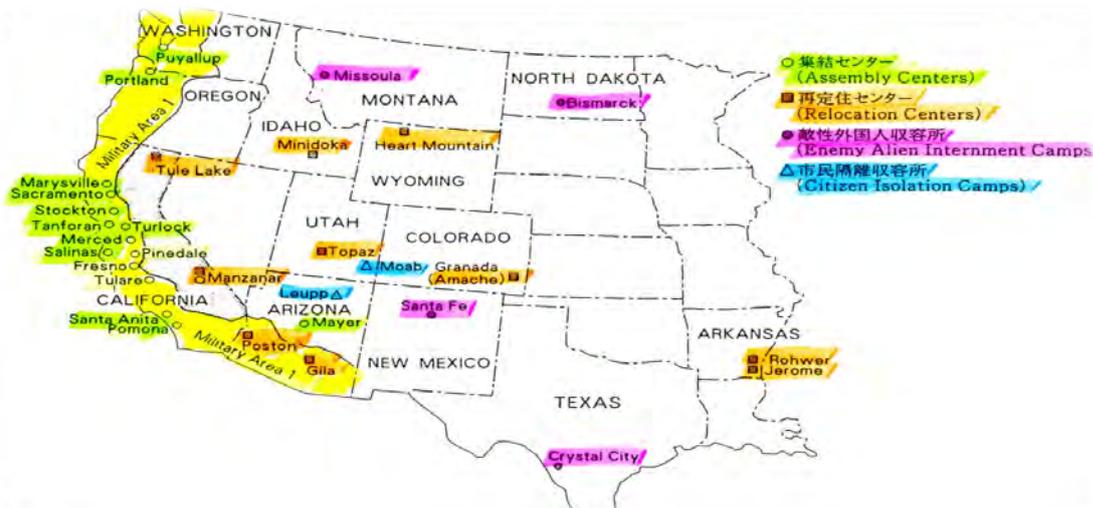
- ・ポテトー (日:ポテト) /pətérɪtɔ̃ | -təu/
- ・キャベーチ (日:キャベツ) /k'æbɪdʒ/
- ・トメトー (日:トマト) /təmérɪtɔ̃ | - má:təu/
- ・ビーア (日:ビール) /bíā | bíā/
- ・アニオン (日:オニオン) /'ɸnjən/
- ・スウキートポテトー (日:スイートポテト) /swi:t pətérɪtɔ̃ | -təu/
- ・アップリカット (日:アブリコット) /'æprəkàt, ér- | éipnik'ɔt/

▶その他

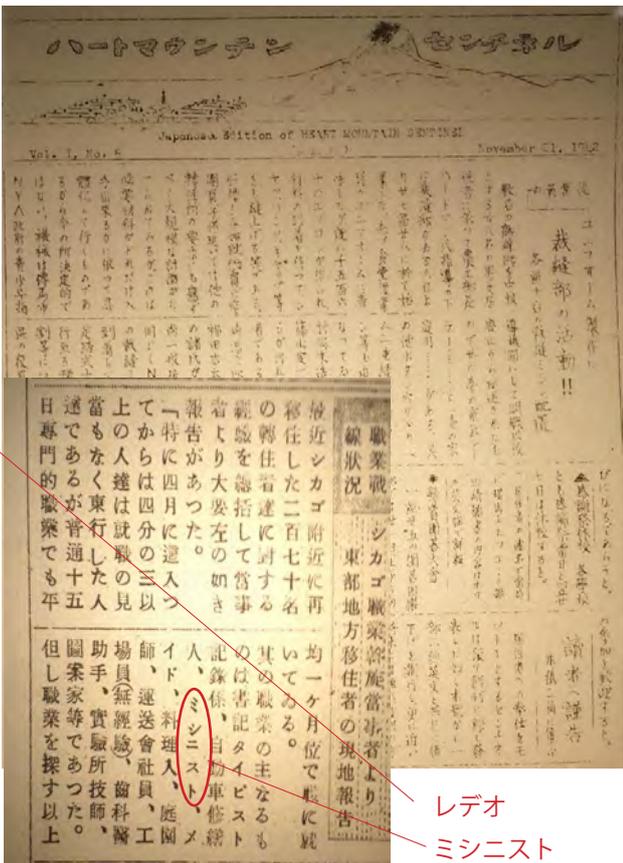
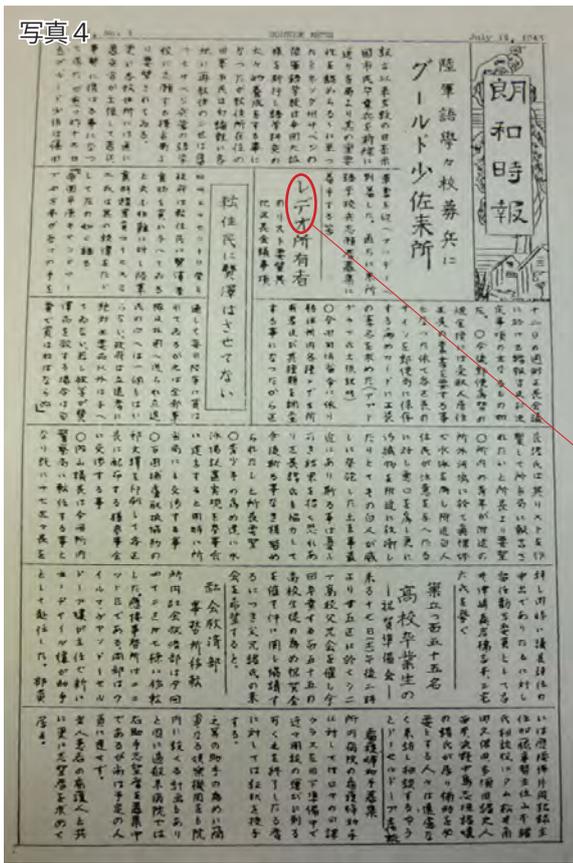
- ・ナショナルシチイ・ナショナルシテイ (日:ナショナルシティ)
- ・レーキサイド (日:レイクサイド)



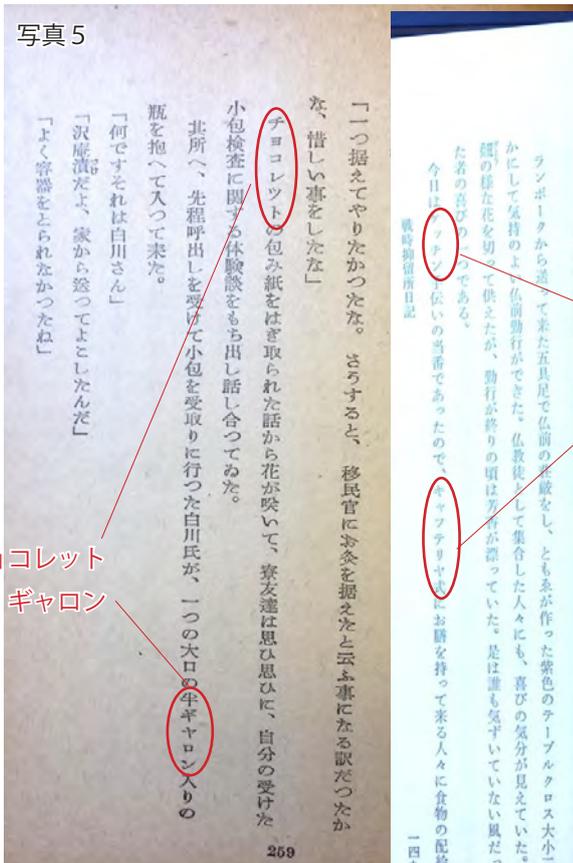
▲邦字新聞にみるカタカナ表記



(図3) 北米日本人の収容所 (大谷康夫(1997)『アメリカ在住日系人強制収容所の悲劇』から)



レデオ
メシニスト



チョコレット
ギャロン

ケッチン
キャプテリヤ

▲ (写真4) 『朗和新聞』、『ハードマウンテン・センチネル』の例
▲ (写真5) 『抑留所日記』の例

写真4は強制収容所の中で発行されたもので、左の方が『朗和時報』、ローワーで発行された新聞です。右の方が『ハートマウンテン・センチネル』です。その中でも、例えば「レデオ」はラジオのことです。/rédiou/と英語で発音しますので、それにやや近い。あるいは「ミシニスト」はマシンの「マ」が「ミ」と発音されている例です。

写真5は『抑留所日記』の一つです。キッチンではなくて「ケッチン」になったり、「キャフテリヤ」になったり。あるいはチョコレートではなくて、「チョコレット」と書いてあります。あるいは「ギャロン」というのはアメリカの分量の単位です。

【3】戦後—『庭園』

では、『庭園』誌(写真6)にその例を見てみたいと思います。

まず北米における庭園業は、一般的な職業の一つです。サンフランシスコの東にバークレー市とオークランド市があるのですが、最初の方が1882年に、オークランドで庭園業を始めたと言われています。その伝統を受け継いで、庭園業を営む人たちが湾東庭園業組合というのをつくって、組合誌の『庭園(The Garden)』という雑誌を発行します。ただ、今は日系人で庭園業を営む人が少なくなってきていまして、非常に高齢化が進んでいて、むしろメキシコ系、ベトナム系、韓国系の庭園業者が多いということです。

『庭園』誌からは、1958年11月号から59年の11月号までの1年間をサンプルとして取り上げました。取り上げた理由としては、例えば新聞であると、文章に編集の手が入るので、若干手が増えられる可能性があります。しかし、こういう一地方の組合誌という同業者の雑誌の中では、カタカナ表記の訂正のような校正が入る可能性は低くなるということです。

そして、この庭園業に関わる人の大半は、米国で生まれ、人格形成期を日本で過ごし、後に帰国した帰米二世といわれ



▲組合誌『庭園 (GARDEN)』

る人たちです。帰米二世には2種類あって、戦前にアメリカに戻ってきた二世と戦後に戻ってきた二世がいるのですが、そのいずれにしても庭園業につく人が多い。庭園業の場合は特に誰の下に付くというわけではなくて、自分で仕事を始めることができ、かつ自分のスケジュールでできるということがあります。また、手先の器用さとか、そういったことも手伝って日系人が非常に多いわけです。

この湾東の庭園業組合の方々も、非常に帰米二世が多いわけです。帰米二世は日本で教育を受けていますから、日本語がかなり分かる、むしろ日本語の方がいい人たちです。ただ、その人たちもまた何十年とアメリカで過ごすわけですので、そのうちにカタカナの表記もかなり米語の影響を受けてくるということです。

例を主に3つ取り上げたいと思います。一つは「オ」段音が「ア」段音に変化するということです(図4)。普通、日本語で表記するときに、例えばスコットさんという人がいたとすると、「スコット」と書きますよ

(図4) 米語音による影響—母音(1)

「オ」[ɒ] 段音：
(コ、ト、ボ、ポ、シヨ、ジヨ、etc)
⇒ 「ア」[ɑ(:)] 段音への転写：
(カ、タ、バ、パ、シャ、ジャ)

- 当夜は**スカット**会社より特別寄附された**ドアプライズ**が贈呈される(日:スコット)
- 多山**タム**氏(日:トム)
- クレジットユニオン**カミテ**ー(貸出委員)の報告(日:コミティ、コミティー)
- クレジット**カミテ**ーの中原君より八月中の借用貸出金額の報告(日:コミティ、コミティー)
- **パブ**T.V.(日:ポブ)
- 有意義な**カンベンション**であると確信する(日:コンベンション)
- 映画会後期日を決定して**パトトラックパーティー**を開催してとの意見も提出された(日:ポトラック)
- 野遊会場にてカメラ**カンテスト**を開催します(日:コンテスト)
- スナップ**シャット**、カメラコンテスト規約(日:ショット)
- 庭園のローンにブラウン**スパット**が有り(日:スポット)
- 馬場**チャニー**(日:ジョニー)

(図5) 米語音による影響—母音 (2)

「ウ」 段音 : 「ク」
(ただし、米語ではC+C (Vは介入せず無声 [∅])
⇒ 「イ」 段音への転写 (「キ」)

- タキスだけ残ればと思ふ **ペイチヤッキ**
 (日: 漢語変換またはペイチェック)
- 銀行 **チェッキ** 預金一千四十四弗八十九仙
 (日: 漢語変換またはチェック)
- **レーキ** メリット湖畔にて毎年打揚げの花火
 (日: レイクまたはレーク)
- **レーキ** タホのような大きな **レーキ** の湖畔にある温泉
 (日: レイクまたはレーク)

(図6) 米語音による影響—母音 (3)

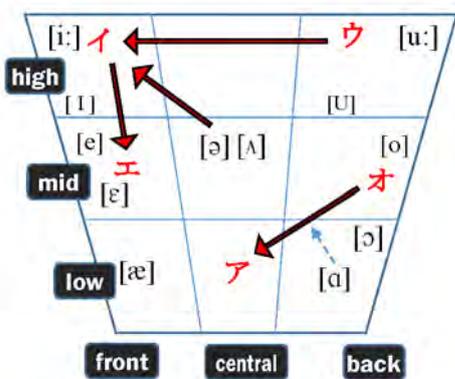
「イ」 段音 : 「ティ」、「ディ」 (米語では [I])
⇒ 「エ」 段音への転写 「テ」、「デ」

- バビーキュウ・**パーテー** が海濱で展開された
 (日: パーティー、パーティ))
- ラフル **テケツ** 売上高 (「ツ」は英語音の影響)
 (日: チケット)
- **ミーテング** の時に (日: ミーティング)
- **ノミネーテング** 委員の選挙が行はれます
 (日: 漢語置換またはノミネーティング)
- 信用貯蓄組合 (**クレデット** ユニオン) も年月の経過するに 従ひ (日: クレジット)

ね。それが原音の発音に近い「ア」に引きずられる形で「スカット」、あるいはトムではなくて「タム」になるし、コミティではなくて /kamiti/ で、「カミティー」となります。あるいはボブではなくて /bab/ 「バブ」と表記します。

その他にも、ポットラックパーティ(持ち寄りのパーティ)も「パットラックパーティ」になってみたり、あるいはコンテストではなくて /kantest/ で「カンテスト」になります。あるいは「シャット」「スパット」「ヂャニー」「カンベンション」と、いずれも日本語では「オ」段の音になるのが普通ですが、それが「ア」段の音で表記されているということです。

次の図5の例が「ウ」段音が「イ」段音に変わることです。ペイチェックではなくて「ペイチヤッキ」です。あるいは、レイクではなくて、「レーキ」という発音になります。



(図7) 母音のシフト (point of articulation)

次の図6の例が、「イ」段音が「エ」段音に変わるということ、これもパーティが「パーテー」、あるいは /tiket/ で、「テケツ」となる。あるいはミーティングではなくて、「ミーテング」、ノミネーティングではなくて、「ノミネーテング」。「クレデット」になるという例が見受けられます。

母音のシフト

図7は口の中と想像していただければいいのですが、左側に鼻があって、「イ」と書いてあるのは口の前の上の方です。そして、反対側が口の奥の下の方で出される音と考えていただければいいです。

今の三つの例で見ると、まず「オ」が「ア」段の音に変化する事例では、表に発音記号がありますが、[ɔ]が「ア」という音です。ちょっと口を開いて、口の奥の下の方で鳴っているという音ですね。ですから、「ア」とも「オ」ともつかない。でも、表記の上では[a]、「ア」に近くなるということです。

また、表のように「ウ」の表記が「イ」の表記に変化し、「イ」が [i:] ではなくて [e] に近づいて、むしろ表記としては「エ」になります。

そしてもう一つ、表のちょうど真ん中にあるのが音声学では曖昧母音 (schwa) といっていますが、曖昧に発音する [ə] という音です。それが場合によっては「イ」で表記されるということです。

もう一度その話をまとめますと、移民の言語変容と

ということで、中濱萬次郎から『庭園』まで見てみたわけですが、特に今の『庭園』でいいますと、「オ」が「ア」に転写しているということで、コミティではなく「カミテー」になります。あるいはコンテストではなく「カンテスト」になります。そして、「ウ」段音が「イ」段音に転写して、「チェッキ」、あるいは「レーキ」になります。そして、「イ」段音が「エ」段音になって、「パーテー」、「ミーテング」になります。あるいは曖昧音が「イ」段音に転写して「ミシニスト」という表記になります。

その他に、前の方で触れましたが、長母音が短母音になる例としてチョコレートではなく「チョコレット」という表記になります。そして、農作物の名称に非常に原音に近いものがたくさん出てきているということで、「キャベヂ」、あるいは「トメトー」、「アニオン」、「アップリカット」、「ビアー」というような表現が頻繁に見られるということです。

今後の課題

今後の課題として、特定の新聞をもう少し詳しく、場面別に見るとすることも必要かと思えます。それを頻度別に、時系列にもう少し詳しく見ていくことです。

そして、今日これまでの講演の中でハワイのことがたくさん出てきましたが、ハワイはカタカナ表記という点では、さらに面白いところかと思えます。ただ、大海原に身をていするような感じなので、今回は扱えませんでした。どうしてかというと、ハワイの場合は、ハワイの中で既にピジン、台湾のお話にありましたが、クレオール化ということが起きていて、その影響もありますし、ハワイ語の影響もあるからです。そういう意味では非常に面白いところですが、これも課題となると思えます。

もう一つは、先ほど小嶋さんのお話で取り上げられたブラジルにおけるポルトガル語です。そして、日系人はブラジルに限らず、その他多くの南米のスペイン語圏にたくさんいますので、そこでまたどういふふうに表示がその土地の言葉に影響されているのか。そういったことをいろいろな地域を横断的に見て比較してみるというのも面白いかなと思っています。

その他にも、例えば社会階層で何か違いが出てくるのか。性差がどうなのか。先ほどの場面、領域ということでは、例えば非常に公式な場面であるとか、政治とか、法律とか、そういった場面ではあまりカタカナ表記は見られないけれども、むしろ日常生活の用語としてカタカナ表記になるケースが非常に多いとか、そういったことをもう少し詳しく見たらまた面白いのではないかと思っています。

下に参考文献を挙げました。特に『庭園』誌については、お亡くなりになりましたけれども、カリフォルニア州サン・レアンドロにご在住の津野義則さんに大変にお世話になりましたことを御礼申し上げたいと思います。

では、私の発表は以上で終わらせていただきます。(了)

石野博史 (1983) 『現代外来語考』 大修館書店

乾 隆 (2010) 『ジョン万次郎の英会話』 リサーチ出版

大谷康夫 (1997) 『アメリカ在住日系人強制収容の悲劇』 明石書店

中濱萬次郎譯 (1859) 『英米對話捷徑』 安政己未晩秋設楽氏蔵版

森本豊富 (1995) 「リトル東京の日本語」 『言語』 第24巻第2号

森本豊富 (2001) 「米国日系人の日英混合使用 - 『庭園』 誌を例に」
 (『語研フォーラム』 14:223-237)



海を渡った日本語

パネル・ディスカッション



パネリスト：真田信治／原山浩介／小西潤子／小嶋茂／森本豊富
コーディネーター：朝日祥之

朝日 では、パネルディスカッションの方に入りたいと思います。私個人もそうなのですが、5人の講師の先生方の話はそれぞれ非常に内容が濃くて、かつそれぞれの地域の状況を、それぞれの視点からではありますが、かなり丁寧に詳しく話をしてくださったということもあったので、随分盛りだくさんだなということを強く認識しています。

今回は生活研究として日本語を見ようということを超旨説明で申し上げました。実際にそれぞれの先生方の話では、まさに言語のレベルで彼らの主要言語になっているものをはじめ、例えば時代背景を受けて日本語が使えなくなるとか、ラジオが聞けないというような話とか、音楽の歌詞に入り込むとか、替え歌を歌うときに意味が分かってい

ながらも日本語を曲解しながらも利用するという話とか、あとは農業をはじめとする産業の中に取り込まれていった日本語、特定の日系人の得意である領域の中での日本語使用ということで、生活を見ることが実に範囲の広いことであり、かつそれぞれを見ることが大切である一方で、やはり多様であるということは、先生方の話を通じて伝わったのではないかと想像します。

どのような形でこのパネルディスカッションを進めていくかということ、この休憩時間が始まるころまで考えていたのですが、実は今日この会場にお越しの皆様からたくさんの質問をお寄せいただいております。各先生方の講演に関するもの、それからこのシンポジウム全体に関するもの、いろいろありますが、せっかくの機会ですから、この時間の中でカバーできそうなものを取り上げて、それぞれの先生方からお答えいただくという時間を設けたいと思います。また他にも、私の方から各先生方に共通の質問を差し上げて、それに対してそれぞれの立場でお答えいただく、ということをしてしたいと思います。

今回は生活で見るということを申しましたし、パネルディスカッションでそれぞれから見た日本語の姿ということについて話題にしましょうということをお申し上げております。それぞれの立場から、例えばクレオールとか、ハワイの日系人、パラオの日本語歌謡を操る人たち、広く小嶋さんが扱ってくださった主にブラジルでコロニア語を使っている人たち、庭園雑誌、庭園業に関わってこられた婦米二世の方々にとって、特に彼らが使っているという意味での日本語と、日本に行くと聞けるであろう日本語というのを当人たちがどのように考えていたのか。

そして、宜蘭クレオールが使われているという報告がありました。ハワイの日系人コミュニティで日本語が使われていたとしたら、他の同じハワイ、台湾、パラオ、アメリカ、ブラジルといったところで、例えば少し職業が違うとか、住む地域が違う人たちから、今回の皆さんのご講演の中で取り



上げてくださった日本語、または日本語に関連する事象がどのように捉えられているのか。当人たちが自分たちの使っていた日本語をどう見ている、周りの人がどのように自分たちの使っている言葉を捉えているのかというようなことについて、それぞれの分かる範囲の言葉で、思うところをお答えいただきたいと思います。

ということで、真田先生が隣に座っていらっしゃいますので、まずは。

真田 突然のご指名ですが、私のお話した宜蘭クレオールは日本語がその語彙の供給言語として関わっているという点はあるのですが、他の先生方と違って、日本語の研究ではありません。これは独自の言語で、彼ら自身のものなわけです。彼らは別に日本語だと思っていません。若い人たちは自分たちの母語だと思っています。ただ、その周辺の村々から見たら非常に日本語が混じっているということで、そういう意味ではあまり良くは思わ



れていないというところが実はあるのです。この若い大学生たちが日本に遊びに来たときにNHKのニュースを見て「分かる」と叫んだのです。分かるというレベルはさまざまありますが、単語レベルではかなり共通しているということがあります。

ただ、彼ら自身は自分たちの母語だとして言語権を主張し、アタヤル語の一つの方言として認知してほしいとする運動の結果、当局が認定し、テキストも作られたわけです。ただ、昨年、一昨年でしたか、検討の上でそのテキスト等はなくなりました。それが、われわれの研究に関わることではないことを祈ります。「日本語だ、日本語だ」と言うつもりはありませんし、日本から大挙押しかけて行ってそれを調べるといったことは彼らの足を引っ張るので、静かに……。彼ら自身から「自分たちの歴史を記録したい。どうしたらいいか」ということで要請があって、今、共同で進めているところではあります。というわけで、日本語が関与しているだけという意味では、ちょっと皆さまのご研究とはレベルが違うかもしれません。

朝日 もちろん、彼ら自身がどのように考えるかということであれば、日本語ではないというのはクレオールだからこそのことだと思うので、それが単なる日本語が関わる現象ではなくて、言語として独自に発達した言語であるからこそだと思います。

では、原山先生、よろしく願いいたします。

原山 朝日さんのご質問に直接答えるのはすぐに思い浮かばなくて、多分お答えにならないのですが、質問のうちの一つに答える形で少し話を近づけて、他の方のお話も聞きながら考えていきたいと思



ます。

「戦争中の話で、他の例えば韓国人とか、中国人とか、そういったアジア系の人たちとある種の横のつながりがあったのでしょうか」というようなご趣旨の質問を頂きました。ハワイという場所を考えると、これはハワイの研究者もそうですし、場合によればハワイの日系人の団体もそうですし、日本の研究者もそうなのですが、とにかく忘れてしまいがちな存在がネイティブハワイアンです。ネイティブハワイアンがそもそもいたところにいろいろなところから人が入ってきて、近代以降のハワイがつくられていったということが一つ前提としてなければならないところです。

先ほどの寄せられた質問へのお答えのような形で申し上げますと、私はまだハワイに関わる研究全てを、全てというのはそもそも無理であるとしても、十分にフォローできていないところがあるのですが、移民の研究というところで、少し全体として取り組みが弱いかなと思うのは、そうした部分なのです。つまり、アメリカに行った日本人、ブラジルに行った日本人など、日本人のことは一生懸命追い掛けるのだけれども、もともとそこにいる人とか、よそからやって来た人との関係において、社会はどうつくられていたのだろうということが、まだ私にとっては見えにくい感じがしています。

言葉という水準でいうと、先ほど森本先生が最後のところで「ハワイのカタカナ表記を扱うのは大海原に身をていするようなもので、すぐには」ということをおっしゃいましたけれども、日本語もちろんなのですが、ハワイ語も含めて、現在の言語生活の中に混交しているような状況があります。例えば私が初めてハワイでスーパーに行ったら、刺身を買おうと思ったら、「Ahi」と書いてあったのです。何だか分からなくて買わなかったのですが、後で聞いたらマグロだと言われました。それはもちろん英語ではないわけです。そういう言語生活の在り方があります。

では、それがそれぞれの時代でどうだったかという、やはり持っている意味は変わっているわけです。先ほど申し上げましたとおり、戦争中に日本語というのはやはり使いにくい言葉ではあった。

そしてそこに、戦争中に日本人と朝鮮人を同様に

扱うのか、あるいは区別（差別）するのかという問題も加わります。そこには、ハワイに住んでいた朝鮮人と、捕虜として日本人と一緒にハワイに連れて来られた朝鮮人、それぞれの問題があります。そうした政治背景とあわせて考えると、アジアという括りは非常に複雑です。

それから、これはまだちゃんと読んでいないのですが、カナダ人の研究者が書いた本で、戦争中に強制収容されていた日本人を黒人がどう見ていたのかという問題を扱ったものがあります。さらに、これは非常にひどい言い方ですが、たしかアメリカ本土だと思いますが、日系人の新聞の中で「自分たちはまだ黒人よりはましだ。黒人ほど差別されていない」という言い分が出てくるときがあるのです。だから、アジアというよりは、むしろネイティブハワイアンを含む、社会的に周縁にある者同士の関係がどうなっていたのかということはいくつか考えてみなくてはいけなくて、ポイントは必ずしもアジアという括りにはならないだろうと思います。

このあたりの研究が非常にしんどいのは、われわれは日本語と英語を勉強することは割とあるのですが、日本語と英語と例えば韓国語を勉強して、ハワイの移民の研究をしに行こうという人はあまりいないわけです。この辺の難しさというのが一つ出ているだろうと思います。

ただ、今日の幾つかご質問があった中で私が多分答え切れないのは、言語の関心でやっているというよりは、むしろ社会そのものの変容をどういうふうに捕まえるかということを考えているためです。ある言葉を使うこと、使わないこと、あるいは使ったことがどう評価されるかということが、恐らくそれぞれの時代、あるいは地域の、例えば政治や権力といったものをかなり反映しているのではないかとところで、今日はお話しいたしました。

卑近なところでいえば、ここにいらっしゃる皆さまの中でも、割とお年を召してから英語を勉強された方というのは、例えばアメリカに行ったらネイティブに近い形で英語をしゃべらないと恥ずかしいという意識が、僕らの世代より強かったのではないかと思います。それは受け入れるアメリカという社会が日本人をどう見ていたか。あるいは日本人がアメリカというものをどう見ていたか



ということにかなり規定されているし、その変容の中で、私などははっきり言うともう少し楽をして、できないところはできないと言って開き直ってやっているところはあるのですけれども。

具体的な話にならなくて申し訳ないのですが、力関係の中での言葉というところをいろいろな形でまたお話しして、今日ももしこの後にもう少し時間があれば、ご質問にお答えしながらちょっと考えていこうと思います。ひとまずそこで止めておきます。

朝日 ありがとうございます。では、小西先生、お願いします。

小西 日本語をどのように捉えていたか、周りはどう見ていたかということですが、今、原山先生からお話があったように時代とか、誰がどう捉えるかによって随分違うと思います。ちなみにパラオ語では、「時代」は「シダイ」といいます。歌の中にも「シダイ」というのが出てきて、初めは何の次第だろうと思っていたら、歴史を「時代」、パラオ語で「シダイ」というようです。

他にも、例えば何かの記念日を「誕生日」というのです。独立記念日の大統領スピーチで「誕生日」という単語が何度も出てきて、「えっ」と驚きました。やはり日本語の使い方、運用の仕方というのがどんどん変わってきて、それが定着していく中で現地のものになっていくということでしょう。

日本語歌謡については、日本語を話す世代にとっては非常に身近なものではありますが、若い人はクラシカルという言い方をしています。言ってみれば、日本語歌謡がパラオのクラシック音楽という位置付けで、日本語が入っている歌が自文化化

しているわけです。それが次第にパラオのものなのか、日本から来たものなのか、時代や世代によってどんどん変化している。それがまだ今だったら追えるところだと思います。

朝日 ありがとうございます。では、小嶋先生、お願いします。

小嶋 コロニア語に関しては、コロニア語を話す方々は少なくなってきていて、最盛期は明らかに過ぎている、コロニア語も消滅しつつあると思いますが、最盛期のころに研究なさっている先生方の成果もかなりあります。今は、皆さんもご存じのように、出稼ぎという言い方をしていますが、日本に南米からたくさんやって来て、一時は30万人以上、今もブラジル人だけで23万人ほどいます。

その出稼ぎ現象が起こってもうすぐ30年たちます。日本にやって来た日系人のお子さんの中で、日本で生まれたという人もすごく多いのです。先々月、私は在日のブラジル人学校でお話しさせていただいたのですが、そのときに集まったブラジル国籍の子供たちに聞いてみると半分は日本生まれということで、そういう状況が進んでいます。ですから、ブラジルの日系人に関していうと、コロニア語もそうなのですが、日本に来ている日系人の中で、言ってみればブラジル系日本語、パラグアイ系日本語といったものも生まれつつあるのではないかという気がしています。

さらに言うならば、在日の日系人の中で、日系ブラジル人と日系パラグアイ人、日系アルゼンチン人と日系ブラジル人という日系人同士の婚姻、カップルも増えています。そういった人たちの日本で話している日本語がどういうふうになるのかとい

うことは非常に興味深いです。

それから、日系人が話しているコロニア語ではなくて、日系人が話しているポルトガル語にも非常に特徴があります。私はポルトガル語学科を出て、大学で随分神父さんに鍛えられて、ポルトガル語を一生懸命勉強したのですが、最初にブラジルに行ったときに「あなたが話すポルトガル語は日系人のポルトガル語とは違うね」と言われたのです。日系人が話すポルトガル語というのは、やはり癖があって、日系人の特徴のあるポルトガル語があって、東京でドイツ系のブラジル人の神父さんに鍛えられたポルトガル語とは明らかに違っていたということがあります。

もう一つぜひご紹介したいのは、アメリカでJAPという軽蔑する言葉があります。今でも間違いなく軽蔑の意味で使っていると思うのですが、ブラジルでもポルトガル語でJAPに相当する「ジャッパ」という言葉があります。それは過去にはアメリカにおけるJAPと同じように、軽蔑する、誹謗するために使っていた言葉なのですが、今現在は必ずしも否定的な意味ではなくて、親しみの意味を込めて使うような状況に変わってきています。言っている方も言われている方も、全く否定的な意味を込めていない。逆に親しみの意味を込めて使っているような状況が生まれてきています。

その背景には、日本というものの存在、地位が国際社会の中で上がってきたということがあります。ブラジルでは、80年代に日本からホンダの車とか、ソニーの製品とか、日本のものがたくさん入ったときに、日系人の若者の中に何が起こったか。それまでは自分が日系人であるということを強く主張することはありませんでした。先ほどの話でいえば、刺身や寿司に関しては、日系人に対してブラジル人は、生魚を食べるという習慣はブラジルにはなかったもので、「あんな気持ち悪い臭いものを食べる。どういうやつらだ」ということで、「Japanês come peixe cru（日本人は生魚を食べるぞ）」と言って、からかわれて嫌な思いをしていた人たちが多かったのです。しかし、その価値が逆転した。日本食というものに対する価値が変わったことによって、今では日本食を食べる人はステータスが高いと思われている。それと同時に、日本製のものが高い評価を得ると、日系人も自分が日



系人であるということに誇りを持てるようになるのです。それで、その「ジャッパ」という言葉に関しても価値が変わってきたわけです。

そういうことが起こっていることを考えると、言葉というものは、国、自分の出生、自分の先祖の国がどのように変わってくるかということにも大変大きな影響を受けるということがよく分かります。

朝日 ありがとうございます。では、森本先生、お願いいたします。

森本 今の小嶋さんのお話と関係があるのですが、非常に言葉、言語使用というのは時代状況に影響されると思います。だから、先ほどの朝日先生からのご質問についても、いつどこで誰が何をどのようになぜといったことをそれぞれに当てはめて考えると、それぞれに個別の理由なりが出てくると思うのです。

私の場合はカタカナ表記ということで文字を扱ったわけですが、文字で書けるほどに日本語ができるのは、やはり一世日本人移民であったし、二世であっても、日本である程度年数を過ごした帰米二世の人に限られると思います。その中でも今回は庭園業を扱ったわけですが、それは本当にごく一部であって、これが決して一般化できるわけではありません。ご質問の中にもあったのですが、地域性というか、地域によって違うのではないかということも、確かにそうだと思います。

ただ、アメリカの場合、かなりの日系人の人口が西海岸に集中しておりますので、西海岸の英語の影響を受けている表記、あるいは実際に話している言葉がかなりの部分で共通しています。あるいは南に行くとまた南部の訛りがありますから、その訛りの影響も、文字で書き表せないにしても、それなりの影響はきっとあったと思います。

周りがどういふふうに見ているかということですが、これも時代状況によると思うのですが、北米も南米もハワイもそうですが、特に1920年代にアメリカが第一次世界大戦に参戦することによって、米化主義、米化運動、アメリカニゼーションというのが起きて、初めはドイツ系の学校に対して外国語学校取締法というのがいろいろな州でできてくるわけです。それが日本語学校にも当てはまって、日本語を自由に教えることができなくな



るといふ状況の中で二世は育つ。

そして、戦争に入ると、ブラジルでもハワイでもそうですが、自由に日本語が使えなくなります。ただ、法廷闘争でドイツ語学校が勝つので、1930年代には自由に外国語学校は運営できるようにはなるのですが、それでも、例えば教える時間とか、先生がちゃんとアメリカの法律、習慣、あるいは言語に関するテストを受けて通らないといけないとか、そういった状況の中での日本語の学びということになると、二世についてはかなり制限されていたということです。

周りがその時代によって非常に厳しい目でも見ていたし、先ほどの小嶋さんのように、かつては非常に差別の対象になったような習慣が今は美化されるというか、いいように取られているということもあるわけで、時代状況によるので、それは決して絶対的なものではないと思います。

朝日 ありがとうございます。実はこれからお返しして議論したいところではあるのですが、残り10分という非常に厳しい時間配分となっておりますので、皆さんからお寄せいただいた質問票の中で、これはぜひここで紹介したいというものが恐らくそれぞれあろうかと思えます。かつ答えるのにそれほど時間がかからないだろうというもの。これを言い出すと5分かかってしまうのであればアウトです。なるべく手短かに答えられそうなものをそれぞれ一つずつお選びになってください。もう答えたというのであれば、それで構いませんが、もしまだとか、他にあるということであれば、それぞれご紹介いただきたいと思います。では、真田先生。

真田 なるべく早口で皆さんのご質問すべてに答えたいと思います。「例えば霧社事件のデータなどによって日本語との接触の状況が明確になるのではないか。なぜ踏み込んだ研究が今までなかったのか」という質問が一つありました。日本軍がやった霧社事件のことはご存じの方が多いと思います。霧社事件を描いた『セデック・バレ』という映画もご紹介します。霧社事件は南投県の霧社というところで起こった事件です。1930年だったと思います。このクレオールは宜蘭県の話です。先ほど申しましたように宜蘭県での移住政策は1910年代ですから、霧社事件の前からクレオールができていくということですが、もちろん直接的ではありませんが、日本人との接触というのも当然あるかと思えます。

それから、クレオールの形成パターンは欧米諸国のそれとどう違うのか、何を特徴にするのか、という質問です。欧米の場合、特に植民地では、支配者といいますが、使用者と労働者というか、いわゆる奴隷との関わりもあります。ハワイのサトウキビ工場での英語クレオールなどもありますが、台湾の場合は学校教育が関わっているといいますが、移住政策で彼らに強要されたといえるのですが、学校教育が関わっているということが、パターンとしては違うと思います。

それから、欧米のクレオール研究で一般化されるような、例えばSVO構文を取るとか、格助詞がほとんどない、あるとしても少数で、前置詞を取るなどといったことが普遍である、という点については、先ほど申しましたように、日本語が上にかぶさった場合はそうではない。欧米の研究者の言う普遍というのがいかに偏ったものかということに今後言及したいと思っております。時間がないので、そこら辺の詳しいことは省かせていただきますが。

次の質問に移ります。「オランダが統治したが、それら言語の現地語への影響はあるのか。」これは南部のことですね。クレオールには直接関係ありません。ただ、オランダ人の宣教師が現地の先住民、台南ですが、シラヤ族にローマ字表現を教えたため、当地の売買契約書がローマ字で書かれています。それが非常に貴重なデータになっていて、死語になったシラヤ語の復興に貢献したというよう

なことがあります。これはクレオールとは直接関係はありませんが。

それから、「アタヤル人とセデック人は衝突しなかったのか。」という質問がありました。それは聞いておりません。ただ、近くのタロコ人（タロコ族）とセデック人の闘争の話は聞いております。

それから、「クレオールが発生するのに時間がかかるのではないか。どれくらいの高さが必要なのか。」これは欧米のクレオールでも言われているのですが、基本的には一世代です。ピジンからクレオールは一世代で起こります。子供が母語として習得する過程で体系化していくわけです。宜蘭の場合も、1910年代に初めて日本語に接し、次の世代の1930年代で既にクレオールが生じているということがその証拠でもあります。

それから、「宜蘭で新しく発見された言語において数詞は混交しているのか」という質問がありました。1、2、3は日本語ですが、助数詞が付くとき1人、2人と言うときは「ウトウフニンゲン、サインニンゲン」と、なぜか助数詞が付くときにアタヤル語の数詞が出てくることがあります。

それから、「宜蘭以外にもクレオール的なものはあるのではないか。日月潭の近くにもあるような話を聞いた。」という質問がありました。ただ、私は台湾全体を見ておりますが、クレオールは他にはありません。ないと思います。宜蘭だけだと思います。ただ、日月潭あたりでは日本語が非常によく使われています。台湾日本語としてはたくさん使われているのですが、それが新しい言語になっているという状況は宜蘭地域だけだと思います。以上です。

朝日 では、原山さん、何かあればお願いいたします。

原山 では、手短かに。「世代間のコミュニケーションに支障はなかったのか」という質問がありました。これは一概には言えないと思うのですが、二つ例を出しておきたいと思えます。

一つは、ハワイで戦争が始まってからの日本語新聞が、行政で書かれた英文翻訳になったと言いました。ただ、その行政側が、ある時期に日本語に訳すための英文社説と英文のまま載せる英文社説の一定部分を違う文章で持ってくる時があったようです。英文欄もありますので、行政側が二世を中心に伝えたいことと一世を中心に伝えたいこ



とが違うということがあるのです。そうはいても、もちろん、例えば一世と二世の片方が英語ができなくて片方が日本語ができないということにはならないわけです。

ただ、一世と三世の間とか、間を一つ、二つ挟んでいくと、ディスコミュニケーションがかなり深刻な問題になってきます。実は日本の在日コリアンの世界でも同じことが起こっています。これは恐らくどこに行ってもそうで、一世代を挟むと全く変わってくるということがあります。おじいちゃんとか、おじいちゃんと曾孫みたいなどころがかなり苦しくなってくるだろうと思います。時間がないですか。では、ここで切っておきます。

朝日 では、小西さん。

小西 「パラオの日本語歌謡の特徴と日本の流行歌と接触する前からあった現地の歌謡の内容的な特徴について、どういう関係があるか」というご質問に補足させていただきます。もともと現地の歌謡では、恋愛の歌以外にも、例えば史実、歴史的なことであるとか、特に政治的なリーダーのことをうたったような歌もあったのですが、それらは日本語歌謡にはならなかったのです。

それは日本からもたらされた歌がほとんど恋愛の歌だったので、ということが一つ考えられます。もう一つは、政治的な歌は内容的に、あるいは時代的な背景としてなかなか日本語歌謡になりにくかったという理由が考えられます。

朝日 ありがとうございます。では、小嶋先生、お願いします。

小嶋 「ふいし・かんかん」という言葉について「『ふいし・かむかむ』ではないか」というご意見を2名の方から頂きました。その可能性もあると思います。これからしっかり調べて結論を出したいと思います。

それから、「朝鮮半島に日本語はどのように残っているのか」というご質問と、それと関連するかと思いますが、「日系人の日本語や文化を研究するに当たって、研究の進んでいない国や地域、あるいは分野があれば教えてください」というご質問を頂いているのですが、共に私は分かりません。朝鮮半島の日本語について、朝鮮半島のことは私は何も分からないので、お答えできません。申し訳ありません。

それから、どこで研究が進んでいないかということも、私がかかっているのはこの地域だというだけで、他の地域のどこが進んでいないかということは分からないので、申し訳ありません。お答えできません。

それから、もう一つ、日本語教師をなさっていたという方から、「『ごみを投げる』という言葉はコロニア語でしょうか」というご質問を頂きました。その可能性は高いと思います。ただ、どこでどういう状況でという具体的なことが分からないと確証を持って言えませんが、「ごみを投げる」というコロニア語はあります。

森本 先ほど一つ地域性のご質問があったのは、先ほどお答えしたとおりです。だから、仮にイギリスに日系人がいたら、イギリス式の発音になるでしょ

うし、従って、先ほどの「オ」が「ア」になると
というようなことは多分起きていないと思います。

もう一つのご質問で、「今回紹介された日系人の
カタカナ表記が現在の日本語のカタカナ表記と異
なる点を「揺れ」という表現を使うことに対して
どうか」ということです。確かにそうですね。や
はりそこを突かれたかという気がするのですが、
言語学でいうと必ずしも正しくないと思います。
そういう意味での「揺れ」ということでは使わな
いと思うのですが、あえて「揺れ」ということで、
海を渡った日本語がカタカナ表記をした場合にこ
ういった違いが出てくるといざっくりした意味
で使っています。そこは最初に規定していなかつ
たので、申し訳ありません。

同じく、「日本国内で統一されているように見え
るカタカナ表記も実はかなり多様ですよ。外国
語の発音の表記での正当性を規定する根拠は一体
何によるのでしょうか」というご質問。何による
のでしょうか。NHK、あるいは新聞社が心配するこ
とだと思うのですが、国立国語研究所はどうなの
でしょうか。その辺は心配すべきことなのか、単
に記述するのが務めなのか分かりませんが、その
とおりだと思います。根拠は特にないと思います。

朝日 ありがとうございます。国立国語研究所の話が
出たのですが、それに触れてしまうとせっかくの
まとめの時間がなくなってしまいますので、また
別の機会にお問い合わせください。

それぞれまだ回答を持っている質問がお手元にあ
ろうかと思っています。講師の先生の間でのやりとり
も予定しなかったのですが、残念ながら時間が許
してくれませんでしたので、今日のパネルディスカッ
ションに関しては、そろそろまとめをさせていただ
きたいと思っています。

今日は1時から5人の先生方にそれぞれ話をし
ていただきました。私個人もあらためて痛感した
のですが、やはりそれぞれの地域の事象というの
は非常に多様であると思います。質問を投げ掛け
て、返ってきた答えが、時代状況によるというわ

けでしょうという感じのことだったので、そんなに
簡単に説明できないということなのだと思います。
ただ、それは別の言い方をすれば、それぞれの地
域で、それぞれの時代状況に応じて、それぞれ細
かく、なるべく丁寧な記述をしていく必要性があ
るということでもあると思います。

幸いなことに、日本語を使って生活している私た
ちが、現地で生活をしている、日本語と判断され
るものを使う人を理解できるわけですから、これ
から少なくとも日本語が関わっている地域、また、
それに関わる人々、それに関わる文化自体に関し
ては、まだまだ研究する必要性があるかと思ひ
ます。

残念ながら、海を渡った日本語の言語研究は、日
本本土内の研究に比べるとやはりやや手薄感があ
ります。こういったさまざまな豊かな言語事象、
さまざまな分野で研究する意義があると思ひ
ますので、ぜひこれを機会に、さまざまな視点で研究
が進められていくことを期待したいと思いますし、
研究に関わっている者としては、自分の立場から
研究をさらに進めていきたいとも思ひます。

幸い、さまざまなことを教えてもらうわけです
から、その機会を逃すことがないようにしたいと思
ひます。もちろん、日本語に関するものに関して
は残念ながら近い将来になくなってしまふ可能性
がありますので、それに従事している人は重々承
知しているかと思いますが、緊急性を伴うもので
すから、若い方も、ちょっと研究をしてみたい方
もなるべくかじってみられるのがよろしいのでは
ないかと思ひます。

時間が参りましたので、残念ながらこれでおしま
いとしなければなりません。今日は5人の先生方、
お忙しいところお時間を下さりまして、貴重なご
講演をありがとうございました。そして、お忙し
いところをお越しく下さいました皆さま、どうも
ありがとうございました。これでディスカッショ
ンを終わりにしたいと思います。ありがとうございました。(了)

主催機関挨拶

影山 太郎

(かげやま・たろう／国立国語研究所長)

本日はお越しいたきまして、ありがとうございます。今日は人間文化研究機構全体の講演会ということで、国立国語研究所としてこれまでになかった新しい企画を考えまして、国内の日本語ではなくて、海外に渡った日本語、海外に渡った移民の方々の日本語がどうなっているかというテーマで講演会を開催いたしました。新しい研究分野を開拓するという意味でも、良いテーマが選べたと思っております。

今日の講師の方々のお考え全てに共通しているのは、言葉というのは非常に複雑なものであり、生活に密着しているものであるということです。われわれが外国語を勉強するときには、型どおりの外国語がペラペラとしゃべれたらいいと思うわけで、言葉はコミュニケーションの道具であると思いがちです。しかし言葉というのは実は単なる道具ではなくて、生活、文化、歴史、われわれの精神性、国民性、あらゆるものがパッケージになって詰まっています。言い換えると、言葉というのは人間が生み出した生き物であるとも言えると思います。現代の言語学では、言語の研究は人間そのものの研究であるという考え方が主流になっていますが、今日の話はまさにそういう方向に向かっての新しい切り口だったと思います。



影山太郎所長

来年の春3月30日には、国立国語研究所の自主企画を、この同じ一橋講堂で開催いたします。そのテーマは、「私たちが現在しゃべっている日本語、近代日本語がどのようにしてこういう姿になったのか」というものです。日本語の歴史の中で比較的研究されていないのが明治・大正のころの日本語です。

国立国語研究所でつくりました明治、大正、昭和初期にかけてのコーパスがあります。コーパスは電子的な資料ですが、それを使った成果が最近になって出てきました。昔あった文語と口語の使い分けがなくなって、私たちは書く言葉も、話す言葉も同じようなスタイルで使いますが、こういったものがどのようにしてできてきたかということを扱います。これもまた、非常に興味深いテーマになると思います。2014年の3月30日にまたここでお目にかかります。

——それではそのときまで、ごきげんよう。



一橋記念講堂（東京都千代田区）

